

東京三才堂

# 求道

★ 第貳號

第貳卷

明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認  
明治三十一年八月一日發行(每月一回發行)



求道第貳卷第貳號目次

求道

◎愚禿悲嘆述懷

◎修養小訓

自信は不動の地盤也  
苦き經驗  
修養の機會  
絕對性の發揮  
佛陀の命は力也  
不可思議力

◎信仰的理想郷なる我が「羽村」

講話

◎金剛の信

實驗

近角常觀

◎懺悔

無漏田貢  
佐々木哲郎

◎信仰の經過を人に告ぐるの書

靈蹟

◎五臺山探勝記

嘆咏

菊法秀言

◎喜

荒川

◎友に

紹介

甲之

◎武家時代の女學叢書◎佛陀論◎起信哲學◎日の罰雷の恩◎  
うかれ笛

時報

◎軍艦日進戰死者追悼會◎第三求道會の實況◎第一高等學校  
德風會夜會◎信仰緣熟の氣運◎求道學舍日曜講話◎第二求道  
會

毎日曜午前九時

求道學舍講話

本郷森川町一帯地

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂)佛教俱樂部

毎月最終土曜午後六時

第三求道會

(濱町)日本橋俱樂部

求道

第貳卷  
第貳號

愚禿悲嘆述懷

愚禿親鸞の一語は聖人の人格を顯はし來りて余繼なし。ル、テ、ルは常に自ら誇りて曰く我は百姓也、百姓の子也、日蓮上人亦自ら旃陀羅の子を以て呼ぶ、皆其人格を知るべき也。而して親鸞聖人が自ら愚禿を以て呼び玉ひたる其味深くして且つ遠し、蓋し愚禿の稱謂、流罪の時に始まる。俗間傳へらく聖人流罪中「日次の日記」なるものあり、其間時々六字名號を書し、又愚禿なる文字所々に記入せらる。宜なる哉、聖人自ら記して曰く、然らば則僧に非ず、俗に非ず此故に禿の字を以て姓とすと、是實に聖人の自白に係るもの、洵に其眞面目を見奉るべき也。而して猶一步進みて考ふるに禿の文字頗る意味深長なるを覺ふ。予一日深草元政上人の「如來秘藏錄」を讀む其文中に涅槃經の意味に曰く、破戒の人を禿人と云ひ、之を保護するものを禿居士と名くと云へり。予此文を見て以爲らく、是ある哉、蓋し涅槃經は聖人が最も熟讀玩味し玉ひしもの、教行信證中に博く諸經論釋を引用し玉ひしと雖、三經七祖已外に於ては涅槃經の文最も多きに居るが如し、故に私かに案するに此涅槃經の文字の如き或は既に聖人の眼底に映ぜしには非るか、聖人自ら無戒名字の比丘を以て居る、何ぞ禿の字義に適當するの甚しきや。然れども聖人が此涅槃經の文字に着眼せられしと否とは、毫も大體に關することに非ず、聖人既に非僧非俗の意味を以て禿と稱せられたるを知れば十分也。他は畢竟蛇足のみ、而して殊に愚の一字を冠せしめて愚禿と稱せらるゝに至りては、其意義の深き實に仰嘆に堪へざる也。

吾人は愚禿の文字を中心として聖人が如何に自己を觀じ玉ひしかを察し奉るを得べき也。後人嘆して曰く、愚禿は聖人自ら卑謙し玉ふの稱也。是深く聖人の謙德を嘆じ奉るの言也と雖、卑謙の意味を能く了解するに非んば却て是聖人の眞相を誤る

ものと斷言せざるべからず、卑謙とは世上一般、身を以て自己の價值已下に置くの謂也とせり、然れども聖人は價值已下に身を置くことあらざりし也、何んとなれば聖人は自ら極惡最下の衆生也と自覺し玉ふ、其價值已下に身を下すべき餘地なき也。故に愚禿とは寧ろ聖人が眞摯沈痛なる告白と謂つべきか、此意義を明らかにせるもの實に愚禿題下の廿四字たらずむばあらず。曰く、聞賢者信、顯愚禿心、賢者信、內賢外愚也、愚禿心、內愚外賢也と、實に是れ聖人が中心の懺悔たらずんばあらざる也。

解して曰く、賢者とは先師法然聖人を指したまふ也、法然聖人實に智慧明達、幼にして文殊の化現と云ひ、後に人皆勞至菩薩と稱す、而も自ら稱して曰く愚痴の法然坊、十惡の法然坊と。詳かに法然聖人の行狀を拜し奉るに戒行圓滿にして一日數萬の佛名を唱へ玉ふ、既に五遍一切藏經を閱覽して諸宗の蘊奧極めざるはなし、而して聖人少しも智者を以て任じ玉はず、德者を以て任じ玉はず、却て身を一文不智の輩に同ふす、實は內賢にして外愚なる者と謂つべし。親戀聖人之を仰ぎ且つ嘆じて曰く、予が如き之を先師に對するに實に正反對たらずんばあらず、既に自ら無戒名字の比丘にして且つ諸の恭敬尊重を受く、口に佛名を唱ふと雖心常に貪愛瞋憎の煩惱を以て覆はる、嗚呼我實に內愚にして外賢を飾るもの洵に僞善の徒、虛僞の輩と謂つべき也と。若し吾人の見地より見れば確かに是れ「内には宏智の德を備ふと雖、名を碩才道人のき、に銜はむことを致し、外には至愚の相を現して身を田夫野叟の類に均しくし玉ひたること」恰も聖人が法然聖人を嘆じ玉ひて、內賢外愚を宣ひたると全く同一なりと雖、若し聖人自身の自覺を察し奉るに、親戀の如く內心の汚穢不淨にして眞實の心なく、清淨の心あらざるものはなかるべし、而も自ら淨土眞宗を標榜し、口に念佛を稱ふ、實に貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性止め難き者、是れ親戀自身也との痛切なる懺悔也。眞個に是れ所謂「末世凡夫の行狀を示し、専ら下根往生の實機を表し玉ふもの」たらずむばあらず。吾人傳々考ふるに、聖人が善導の至誠心を釋するに當りて文字の羈絆を破りて自由に文點を施し、苟も眞實清淨の文字あらば一に之を佛陀に歸し、虛假汚染の文字は皆之を自己に歸し、而して自ら清淨にし又眞實にするの能力なしとし、單に佛陀の眞實清淨を用ゐる而已を以て唯一の救済を示し玉ひしもの、實に聖人が胸中の寫眞也。而して「外に賢善精進の相を現する

れ、内に虚假を懷けば也」と云へる一節は慥かに聖人の眞面目を寫し出て余蘊なし。蓋し是れ聖人自ら警しめ玉ふもの、然れども人間は徹頭徹尾虚僞の結晶也、之を清ふせむと欲するも不可能の事、遂に痛嘆骨に徹して曰く「内に虚假を懷けば也」と。而して内愚外賢の文字は確かに此文句より流れ出てしにはあらざるか、實に聖人が内心の悲嘆を告白せられしもの、聖人信卷に於ける悲嘆の文字と全く同一意義たらずんばあらず。曰く「誠に知ぬ悲哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし、傷むべし」と。文字僅々四十字に過ぎずと雖、懺悔骨に徹し、慚愧髓に入る、而して引續き引用し玉へる涅槃經阿闍世王の苦悶は確かに其實驗を描き玉ひし者、阿闍世王の慚愧は即聖人の慚愧也。而して一朝吉水の禪房を叩きて忽ち他力攝取の光明に接し玉ひたるは、即ち伊蘭林中旃檀樹を生ずる者、所謂無根の信たらずむばあらず、和讃に「大聖をのくもるともに、凡愚底下のつみ人を、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり」と詠じ玉ひしは即ち、自己の實驗を直寫し玉ひしものにあらざらむや。

聖人が悲嘆の極所は實に述懐和讃に於て遺憾なく描かれたり。既に題して愚禿悲嘆述懐といふ、詳かに其一言一句を味ひ奉るに内心の奥底より溢れ出てたる沈痛なる懺悔なり、聖人は先づ自己の内心を懺悔し玉ふ也、自己の不清淨を嘆き玉ふ也、自己の不眞實を悲み玉ふ也。吾人は如何にするも聖人の一點の余地なき痛切なる情を描くことあたはず、唯聖人の口より迸り出てたる御言の儘を味ひ奉らむかな。曰く

淨土眞宗に歸すれども、  
眞實の心はありがたし。  
虚假不實のわが身に、  
清淨の心もさらになし。

噫、淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、吾人は如何とも云ふべき言を知らざる也。聖人以爲、我先師法然聖人の教を被りて、幸に撰擇本願の不思議をさし、淨土眞宗に歸し之を標榜して人に向て法を説く、而して自ら顧みるに眞實の心はありがたしと、且つ嘆じ玉はく、虚假不實のわが身に清淨の心もさらになしと。噫何人か自ら惡人を標榜して猶惡を寛容せむとする、若し眞宗は不眞實不清淨を寛容されたるが如き邪見に陷るものあらば須らく聖人が此懺悔の言の下に懺悔し奉るべし。



淨土眞宗なる名目は實に聖人の生命也、聖人の眼目也、而して自ら宜はく、我眞宗を口にすると眞實の心なく、我眞宗を筆にするも虚假不實の我身也と。若し人ありて、宗教家の軀面を侮辱し、信仰の根本に向て輕蔑を加ふるものあらば、必ずや佛然として怒らざるもの幾何かある。而して聖人自ら懺悔するに、宗教家として信仰家として最も忍び難きの點、道破し難きの箇所に向て一點の余地なく披瀝し玉ふ、悲哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑す」と號泣し玉ふ所以のもの實に茲に在り。然るに現時眞宗の徒其懺悔の言を以て恰も寛容されたる特典の如く考ふ、恰も是れ孝經を以て親の頭を撲ち父母の膏血に衣食して却て父母を傷ましむるもの、聖人安養淨土より之を觀そなはして如何に哀愍の涙を注ぎ玉ふらむ、聖人の悲嘆は唯内心の披瀝に止らず、猶進みて宣はく心既に此の如く不實不淨にして猶清淨を整ひ、眞實を飾らむとす、實に偽善の骨頂也曰く、

外儀のすがたはひとごと

賢善精進現せしむ、

貪瞋邪偽おほきゆへ

奸詐もいばし身にみたり、

實に聖人が「内愚にして外賢也」と悲嘆し玉ひたるは即此點也、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚假を懷けは也」と述懐し玉ひたるも即此點也。聖人が苦妻毆肉、一點の修飾なかりしは確かに此懺悔の反映なりしと雖、誤て之を以て賢善精進を現せざる眞摯なる行爲なりと自任するに至りては、度すべからざるの極。偶々之を懺悔するものあるも、多くは是口頭懺悔を飾るもの、最も眞面目なるべき懺悔を以て偽善を行ふもの。人間は徹頭徹尾虚偽の徒、若し人間にして眞實の善を修し清淨の行を全ふせるものあれば所謂是れ市に虎あらむが如し、曰く、

惡性さしにやめがたし、

こころは蛇蝎のこころなり、

修善も雜毒なるゆへに、

虚假の行とぞなつけたる、

善導大師が貪瞋邪偽奸詐百端にして事蛇蝎に同じと云ふもの、實に吾人の心也。我善を修せりと云ふこと勿れ、必ずや雜毒の善なるべし、我行を完ふせりと云ふ考起らば、反省せよ、必ず虚假の行たるべし、噫此の如く一點眞實の心なく、一毫清淨の行なし、既に此の如く微かなる希望の光なし而して吾人此人生を如何にせむ、曰く

無慚無愧のこの身にて

まことのこころはなけれども

彌陀の廻向の御名なれば

功德は十方にみちたまふ

幸に彌陀廻向の名號南無阿彌陀佛あり、是實に清淨の結晶、眞實の凝塊也、此中に不可説不可稱不可思議の至徳を成就し玉へり、我計らはざるに佛自ら計らはせ玉ふ。既に此の如く、自ら度する能はず、自ら救ふ能はず、幸に佛の願力ありて一條の活路を得たり、何の餘方ありて人に慈悲を施すといひ、又衆生を利益すと言はむ。傳聞らく昔、パーセルのニコラスなる俗人は他を教めるの力なきを自覺して二年間沈黙自ら責め、遂に踟躕悲泣其出づる所を知らざりしといふ。噫吾人宗教家を標榜し、信仰を叫ぶの徒三たび心を致すべきの所、聖人の懺愧は此極に達せり、曰く

小慈小悲もなき身にて、

有情利益はれもふまじ、

如來の願船いささずは、

苦海をいかでかわたるべき、

噫「難思の弘誓は難度海を度するの大船也」幸に此大船あり、唯自ら此船に乗り、亦人を此船に乘らしむるのみ「生死大海の船筏なり、罪障重しとなげかざれ」幸に無限の生死海中に於て此津梁を得たり、若し此願船なかりせば吾人何を以て生死海を渡るべき、濁世の起惡造罪は、暴風驟雨にことならず、既に櫓拆れ、楫碎く、百千萬却沈淪を免れざる也。曰く

蛇蝎奸詐のこころにて

自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまては

無慚無愧にてはてせむ

噫「如來の廻向をたのまては、無慚無愧にてはてせむ」嗚呼聞にあるもの何ぞ聞を悟らむ、聞を悟るときは既に明の來れる時也。懺愧の心の起り來るも全く如來の廻向あればなり、三冬凜烈風寒く氷益々凍る、何ぞ氷の解くるあらむや、氷既に解くるは一陽來復すれば也聖人曰く、誠に知ぬ經に説きて煩惱の水解けて功德の水となるが如し」と、東方白きの時は世界を照す日輪の來れる時也、地下暖かなる時は千里の春光の回れるの時なり、吾人心中に罪惡を自覺し、懺愧の情溢れ、懺悔口を突きて出づる時は本願大悲智慧眞實恒沙萬德の大寶海の中に遊びたるの時也。是實に帖外和讃に嘆咏し玉ひし所、曰く



大願海のうちに、  
弘誓の船にのりぬれば、  
超世の悲願きしより、  
有漏の穢身はかはらねど、  
心は淨土にすみあそぶ、

是實に聖人か。大悲の願船に乗して光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜かに、衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速かに無量光明土に到り、大般涅槃を證し、普賢の德に遊ぶ。との玉ひし靈境也。嘗て吾人以爲、親鸞聖人晩年に及びて罪惡觀漸く減じ去りて唯佛陀の慈悲に感泣し玉ひしが如し彼の帖外讚の如きは其情を披瀝せられしものならむと。今にして大に其誤れるを發見せり、何んとなれば一方には彼が如き帖外讚の存すると同時に、同じく晩年に於て一方には此の如き述懷和讃あり、寧ろ晩年に及びて益々罪惡觀深くして益々如來の慈悲の深さを感じ玉ひしもの、如し、實に此の述懷讚と彼の帖外讚とは慚愧と歎喜の好一對と鑽仰し奉るべき也。

愚禿悲嘆述懷此の如く其極に達せり。而して聖人の悲嘆述懷は先づ自己の缺點を自覺し玉ひし也、自己の罪惡を悲嘆し玉ひし也、自己の慚愧を述懷し玉ひし也、宗教改革の一着歩は實に此點より起る。吾人常に以爲らく信仰は内心の革命也と、既に自己を革命せざるもの、何ぞ人を改善し、社會を改良し、宗教を改革するの力あらむ、否吾人は自己の力にて自己をすら改革する能はず、況んや他をや。然れども自己を改革し玉ひし佛陀の光明、如來の廻向は、たしかに一切の衆生を救済し、宗教の腐敗を改革し玉ふべし。故に聖人自己の見地に立ちて少しも他を慷慨し玉ふことなし、然れども佛教の眞精神に對し、如來の冥見に對して當時の佛教の誤れるを悲嘆し玉ふこと、亦自己を悲嘆し玉ふこと、少しも異なるなし、此點に於ては自他の區別なく、彼此の差別なく、述懷余蘊なし。曰く

五濁増のしるしには、

外儀は佛教のすかたにて、

この世の道俗ことごとく、

内心外道を歸敬せり

かなしきかなや道俗の、

良時吉日えらはしめ、

天神地祇をあかめつゝ、

ト占祭祀をつとめとす、

僧を法師のその御名は、

たうときとゝきゝしかど、

提婆五邪の法にて、

いやしきものになつたり、

外道梵士尼乾士に、

こゝろはかはらぬものとして、

如來の法衣をつねにきて、

一切鬼神をあがむなり、

かなしきかなやこのころの、

和國の道俗みなともに、

佛教の威儀をもとして、

天地の鬼神を尊敬す、

五濁邪惡のしるしには、

僧を法師といふ御名を、

奴婢僕使になづけてそ、

いやしきものとさためたる、

此の如きは聖人當時の佛教が其眞精神を誤れるを悲嘆述懷し玉ひしもの、而して聖人は決して之を攻撃し玉ひしには非る也、之を蹂躪せんとし玉ひしには非る也、寧ろ聖人は此の如き誤れる佛教徒より迫害せられ玉ひし也、此の如き僞れる僧侶より攻撃せられ玉ひし也。佛教の眞精神を味ひつゝ愚禿を以て呼び玉ひし聖人は内心外道の精神を寓して戒行の威儀を標榜する南北の僧侶の爲に誣告せられ玉ひし也。而して此間に於て聖人は唯如來の慈悲を仰き、彌陀の廻向を蒙り、唯佛慧功德をほめしめて十方の有縁にきかしめ玉ふ也、是遂に信仰の一點火自然法爾の間に佛陀の力によりて宗教界の改革を大成し玉ひし所以也。

世の宗教改革にあこがるゝ青年須らく心すべき也、若し聖人を呼ぶに慷慨悲憤世を怒り人を罵るが如く觀察するものあらば是聖人の人格を誤ること太甚しと謂つべし。聖人は自ら稱して無戒名字の比丘と云ひ、信者の供養恭敬を受けるを慚愧し玉ふもの、何ぞ他を責め玉ふことあらむ。我も人も自も他も皆罪業の徒、不實の人たらざるはなし、曰く

無戒名字の比丘なれど、

末法濁世の世となりて、



舍利弗目連にひとしくて、  
 供養恭敬をすいめしむ、  
 罪業もとよりかたちなし、  
 妄想顛倒のなせるなり、  
 心性もとよりきよけれど  
 この世はまことのひとぞなき

實に是れ末法燈明記によれるもの、大集經に曰く若し偽實なくは赤白銅鐵白錫鉛を無價の寶となす如く、漏戒の比丘なくば名字の比丘を以て無上の寶とす、餘の九十五種の異道に比するに、もつとも第一とす。又賢愚經に曰く若し檀越將來末世に法乘つさんとせんに、まさしく妻をたたくは、子をわさばさまん、四人已上の名字の僧衆將に禮敬せんこと舍利弗大目連等の如くすべし、たとひ戒をたまたずと雖、彼等はことごとく既に涅槃の印の爲に印せらるゝ也と。此の如く聖人自ら甘んじて破戒名字の比丘なりと懺悔し、唯喜び玉ふは金剛信の行人として眞の佛弟子となり、不斷煩惱得涅槃の妙味を味ひて他の九十五種の外道と異なるの一點にあり。然るに當時の僧侶既に佛教の威儀を具へて内心外道を尊敬するのみならず、遂に佛教の威儀、僧侶の法衣をも他の下僕下婢の上に被らしめ、少しも佛教の眞精神を存せざるのみならず、三衣解脱の幢相までも侮蔑するに至れり、曰く

末法惡世のかなしみは、

南都北嶺の佛法者の、

興かく僧達力者法師、

高位をもてなす名としたり、

佛法あなづるしるしには、

比丘比丘尼を奴婢として、

法師僧徒のたふとさも、

僕従ものゝ名としたり、

聖人は實に骨髓を得玉ひし佛教徒也、眞個に釋尊を慕ひ玉へる眞の佛弟子也。聖人の釋尊に對し玉へる態度に至りては其味極りなし、聖人は自己が釋尊と趣を同じくするものなりとの念少しもなく、亦釋尊と歩調を同じくせむとするの念慮なし。常に曰く「釋尊の如く種々の應化の身を現じ三十二相八十隨形好をも具足して説法利益候にや」と、寧ろ企て及ぶべからざるもの、之を彌陀と同一體と見玉ふ。故に釋尊を常に口にせずして、心中驚くべき敬虔の態度を以て尊敬し且つ慕ひ玉ふ、釋迦如

來かくれましゝて、二千余年になり玉ふ、正像の二時はをはりにき、如來の遺弟悲泣せよ」と、此點に於ては精神上に於ける眞の佛弟子也。而して當時南都北嶺の名僧も多くは形式の僧侶外儀の弟子たらずむばあらず、故に述懷讀十六首は自己か内愚外賢を嘆ずるとともに亦當時の佛教の内外道外佛教を悲み玉ひし也。故に其結文に曰く

已上十六首これは愚禿がかなしみなげきにして述懷としたり、この世の本寺本山のいみじき僧とまふすも法師とまふすもうちきことなりと

嘗て聞く行誡上人、教行信證を評して曰く、是選擇集より來るが如きも實は善導より來れる也と。當時吾人之を聞きて以爲らく善導より來ると云はむよりも寧ろ曇鸞より來ると云ふの適切なるに如かずと、然れ共當時の予の考の如きは何人も氣附くべきの所、聖人の曇鸞大師に私淑せられしは明瞭なる事實也。是蓋し如來の本願力不思議を實驗し玉ひたる點に於て心絃共鳴せられしなるべし、然れども信仰の半面たる罪惡懺悔の一點に至りては慥かに善導大師に私淑せられしこと明らか也。信卷に中心として描かれたる三信釋は實に善導に淵源せしもの、殊に至誠心釋は其眞髓なり。吾人は聖人か愚禿の稱謂を味いて愚禿鈔の内愚外賢に移り、進みて悲嘆述懷讀に移り、内外道外佛教に移り、遂に最後に其根本信念たる至誠心釋に着眼するに及びて此に終結として愚禿鈔結尾の至誠心釋五對の終たる内外對を味はずむばあるべからず。是聖人が悲嘆述懷を悉く列舉し盡したるもの、彼述懷讀を味ひ奉りたる眼光を以て拜讀すべし、曰く

内外道にして外佛教

内聖道にして外淨土

内疑情にして外信心

内惡性にして外善性

内邪にして外正

内虛にして外實

内非にして外是

内僞にして外眞

内雜にして外專

内愚にして外賢

内假にして外眞

内退にして外進



内疎にして外親  
内迂にして外直  
内輕にして外重  
内苦にして外樂  
内怯弱にして外強剛  
内間斷にして外無間

内遠にして外近  
内違にして外順  
内淺にして外深  
内毒にして外藥  
内懈怠にして外勇猛  
内自力にして外他力

回顧せば吾人嘗て「靜觀錄」(信仰の余瀝)を書せしの時其三に曰く「内剛にして外柔なるべし」と、此言を以て聖人を讃嘆し奉りし也。然るに今や聖人自ら懺悔して「内怯弱にして外強剛」と宣ふ。今にして之を思ふ、正反對なる言語を以て聖人を讃嘆し奉らむよりも寧ろ聖人の言語に順して沈痛切實なる悲嘆述懐を味ひ奉ること却て聖人の本懷たらむが。而して「内懈怠にして外勇猛」又「内間斷にして外無間」なる懺悔を拜聴するに至りては吾人自己の信後相續の上に反省し來りて悚然として恐懼措く所を知らず、聖人の遺靈に對して慚汗脊を濕すを覺ゆる也。

夫れ三惡道をはなれて、人間に生るゝこと、おほきなるよろこびなり、身はいやしくとも畜生におとらんや、家はまづしくとも餓鬼にまさるべし、心におもふことかなはずとも、地獄の苦にくらふべからず、世のすみうきは、いとたよりなり、このゆゑに人間に生れたることをよろこぶべし、信心あされども、本願ふかきゆゑに、たのめばかならず往生す、念佛ものうけれども、となふれば定て來迎にあつかる、功德莫大なるゆゑに本願にあふことなよろこぶべし、又云く、妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念のほかに心はなきなり、臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞとこゝろえて、念佛すれば來迎にあつかりて、蓮臺に乗ずる時ころ、妄念をひるがへして、さとり的心となれば、妄念のうちよりまうしいしたる念佛は、にこりにしまぬ蓮のことくにて、決定往生うたがひあるべからず

(横川法語)

## 修養小訓

自信は不動の地盤也

古より新らしき信仰の起る必ずや偉大なる自信の伴ふありて最後の勝利を占めざるはなし、中世に於けるフランシスカスを初めとして其修道院の一派は貧を以て最も神聖にして且つ貴きものと考へたり、而して是れ遂に中世教會の勢力をして九鼎大呂よりも重からしめたるものにあらずや、ビュリタンの起るや自ら神の特選を受けたる人民なりとの自信力は遂に亞米利加大陸に清らかなる別乾坤を作り出し、又英國教會の空氣を一掃して新鮮ならしめし所以にあらずや、みよ、日蓮上人は法華の行者迫害せらるゝは經文の懸記に合すと信じ、親戀聖人は念佛の行者を以て無碍の一道也と宣ふ、抑々信するは絶對の力也、否絶對の力を信するものは、たしかに絶對の力ある也。

## 苦き經驗

苦き經驗をなすときは必ず修養上進歩の行程にあるの時なり。旅行するものは必ず苦き經驗を感じ、奮闘するものは必ず苦き經驗を感じ、古より宗教の祖師常に迫害を蒙り、世の誤解を招く、而して其間に於て感謝の情油然而して溢れ、清新の信念發止む時なし。燧を鑽りて火發し、木相摩して熱を生ず、水石に碇へられて其力を顯はし、電流抵抗に遇ひて初めて火を發す、信念内にあるものは困難に遇ひて其光初めて顯はるゝを見る。

## 修養の機會

人は常に修養の機會を逸せざることに注意せざるべからず。修養の機會を求むる決して難きに非ざる也、唯自己の信念に訴へて人生常に一種の理想を有すべき也、而して之に向て直到せよ、佛力の偉大なるを感ずると共に常に修養の機會を得む。世の太平無事を誑ふて、修養の機會なしと云ふもの、多くは柔和の名の下に信念を犠牲にして修養の關門を通るゝもの也、信念を以て世上の激浪と戦はずして、激浪に漂ひて風波の間に唸唱するの輩也。修養の機會は人生到處眼前に在り、要は之を見たと見ざるに在り。

## 絶對性の發揮

修養上最も注意すべきは絶對性の發揮也。酒を禁ずるものは須らく絶對に之を禁ずべし、喫烟を禁せむとするものは須らく



絶對に之を廢すべし。孟子が所謂今より後日日に一雞を盜まむと云ふものは絶對性なる不眞面目の態度なり、涅槃經に所謂浮囊を帶びて大海を渡るの譬喩の如し、海中の羅刹之を求む、之を與へざる固より其所也、羅刹其半を請ひ三分の一を請ひ、手掌ばかりを請ひ、微塵ばかりを請ふに及び誰か心を動かさざらむ。浮囊は禁戒を喩へ、羅刹は即ち誘惑なり、一杯の酒、一本の煙草十年修養の功を一朝にして破る、此時に當りて内心に響く佛陀の靈勅は絶對性を發揮し來りて善く危きを導き玉ふ、信後の修養一として絶對佛陀の力ならざるはなし、噫。

### 佛陀の命は力也

人あり問ふて曰く、我日常の生活一に佛陀の命令によりて動かむことを欲す、然れども事件に遇ふに及びて右すべきか、左すべきか、佛陀の命令何れにあるかを判断するに苦むと。曰く、是佛陀の命にあらず、自己の判断のみ、單に名を佛陀の命令に假りて躊躇するのみ、此の如き場合左右の是非何人か了解せざるものあらむ。唯利害の觀念に支配さるゝが爲に判断に苦むのみ、而して佛陀の命令は此の如き利害の念に拘はらず走て其善に就かしむるの力也。又人あり問ふて曰く、我日常の生活一に佛陀の命令によりて動く、故に事に臨むや自然法爾事の成行に放任すと。曰く是れ自然法爾にあらず放任のみ、單に名を佛陀の命令に假りて放任するのみ、寧ろ佛陀の命令は苦しきに堪へ、逆流に掉さるべからざることあり、而して此の如くせずむは止む能はざらしむる力、是自然法爾也。前者は佛陀の命令を良心の判断の如く解するの誤謬に陥れるなり、後者は佛陀の命令を運命の如く解するの誤謬に陥れる也、要するに佛陀の命は即佛陀を信するによりて生し來る力也、故に信なきものは遂に佛陀の命令を知るべからず。

### 不可思議力

佛陀の力は不可思議の力也、不可思議の力は遂に吾人の了解すべからざるものなり。佛陀の力は内心の力となりあらざる、のみにあらず、人生の上に世界の上に常に顯現するもの也。而して其力たるや吾人の測量するあたはざる所若し名を佛力に借りて意外の結果を予想するが如きは不可思議力を思議せむとするもの、決して不可思議力を信するものにあらざる也。故に吾人不可思議力を信すと云ふと雖、實は信じて初めて不可思議の不可思議たるを知るを得るもの也。

## 信仰的理想郷なる

### 我が「羽村」

御佛の眼より御覽なれば世の中に不思議と云ふことは一つもなかるべきも、我々人間の眼には不思議なることばかり、殊に御佛の爲し玉ふことは實に不思議なる事ならぬはなし。「五つの不思議」とくなく、佛法不思議にしくぞなき、佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓に名づけたり」と云へる御和讃も昔は單に論註の和譯に過ぎずと考へて居たが、其時には「佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓に名づけたり」とは、聖人が例の獨斷的筆法を用いたるものなりとのみ考へて、彌陀の誓願不思議は如何程廣大なるものか分からざりしなり。私が何時でも不思議に感ずるは人々が御佛の光に接して信仰を得玉ふ事實なり、殊に最も不可思議に感ずるは我が信仰的理想郷とも云つべき多摩川上水なる「羽村」に於て信仰の起りたるのである。茫々たる曠原雜草のみ生ひ繁げれる中に何處ともなしに一粒落ち來りたる粉粒は遂に段々増殖して澤山の収獲を得るに至る如く、不圖した縁より此美しき羽村に一粒の佛種が落されてより、段々其種の擴がることのない不思議さ、殊に其數に於ては一時に澤山にならず、又澤山にせんと企つることなきも、一回一回と實に健實なる收獲のあること何とも不思議に堪へられぬ。有體に告白すれば「羽村」

は我が信仰上の新開墾地の様な心地がする、否開墾地と云ふよりも試作場の様に考へられる。何んとなれば同地には從來の宗教的習慣と云ふものが善惡ともに少しもなき故に、信仰が人心の必需の要求により實驗上獲得せざるべからざること、試めざるゝからである。されど試作場など云ふことは何んとなく、如來より賜はる御信心を我物顔にする虞がある、加之試作など不眞面目なる文字は避くべきことと考へ、寧ろ佛陀が此美しき羽村に佛種を下して信仰的理想郷を實現せしめ玉ふことと考へて居る。如來の御催にあづかりて念佛申し候人」とは實に此羽村に於ける信仰の勃興につきて明らかに示されたる事實である。私は事實を其儘に書きつらねて見ようと思ふ。

指折り數ふれば一昨年の秋頃の事かと覺ゆ。府下西多摩郡羽村の小作伊助と云ふ名前にて手紙が來た。其手紙の意味は、私の地方に耶蘇教が入り込んで頗る憤慨に堪へぬから、佛教の演説會を開きたいと思ふ、が如何すればよいか、知らして呉れとの意味であつた。若し是が三十三三年の運動の時分であつたならば、左程怪しみもせなんだが、現今にしては少々妙な心持がする。併し耶蘇教の蔓延を頗る心配せらるなどは、定めて從來親の代より養はれた佛教の盛なる土地柄なるべし、トモカキ必ず感心なる心掛の人なるべければとて、かく返事することにした。曰く、信仰の事は如何にして自分自身が安心すべきかと云ふ問題にて、他人の事など言ふべき餘地のあるべき等はない、若し此意味に於て佛教の信仰を得たしとの事なれば、此方より參りてもよろしい、併し事情が十分分



からぬ故に、次手に一度來談あるべしと言ふてやつた。其後暫して一人の青年が黒き衣服を着し、黒き前掛をして如何にも質樸に、しかも元氣な様子をして尋ねて來られた、それが小作君であつた。私が面會して見たが、始めは頗る要領を得なんだ、從來佛教の盛なる土地であるかと尋ねしに、佛教のことなど少しもないとの答、全體演説を聞くには如何にすべきかとの尋、益々出て、益々不思議、兎も角も都合よき日に會場を選定して、人を集めて置かるれば、其日に參りて演説すべしと約束せり。

其後或日を卜して予は百目木君とともに羽村に出掛けた。飯田町から甲武鐵道で立川まで行き、其所から青梅鐵道へ乗り換へて二つ目の停車場が羽村である。空氣が頗る清潔で何とも云へぬ淨らかなる感がある。先づ禪林寺といふ寺に案内された。和尚は頗る快活な人で、心から迎へられた。晚餐がすみてから、本堂に於て演説會を開きた。石田佐一と云ふ青年の方が開會の趣意を述べ、百目木君が演説して私が二席演説した。聴衆は子供が三分の二を占めて、他は青年やら中年の人であつた。此時述べたのは小供に面白き本生談をして次に信仰の經驗と日本歴史の精神上の發達を比較した例の私の持論を述べて、日本の佛教の大體を紹介し、又私の苦悶信仰の實驗を述べて余程人情の微細な點までも穿ち、遂に青年が同心一體の心掛を持つべきことをすゝめた。自分て言ふは如何はしき事なるも、一般に非常に感動を引起した。併私の記憶するところによると、決して演説は上出來の方ではなかつた。しかるにかくまでも聴衆が感動されたのが不思議であつた。

時、昨夜の不安の氣色したる人は、深き感謝の情面に溢れて我等を見送らんが爲に來りぬ。

## 二

昨年の夏六月頃に一人ありて、嘆息鈔一冊を買ひ求め、猶序に求道會館の設立費にとて、寄附をせらるゝ人があつた。其名刺を見たるに、西多摩郡羽村の中里庄五郎とある。予は頗る不審を抱きた。羽村は前年ゆきたる所なるも、全体佛法のなき土地柄なるに、かく深き志の人あるは不審に堪えぬ、トモカク面會せんとて請し入れて相對するにすべて態度が眞面目で恭謙である。而して自ら告白して言はるゝに、自分は昨年御出の時、初めて佛教をき、大に救はれたものであります。實は從來酒を飲み、品行を亂し、すべての罪惡を犯したものであつた。そして自分で其惡しき事は、少しも氣附かなかった。勿論佛法などは少しも聞かぬがなかつた。現に昨年演説會の時に、村の青年が賛成してくれと云ふから、聞く丈は聞きに行きてやろうと、放言して、其日親類の相談事があつて、行きたが、他人が來ぬゆゑ、止むを得ず演説會をきゝに出かけた。其日も酒を飲み、頗る酩酊して、本堂の隅の太鼓の下で聞きて居つた。不思議なことには、演説を聞きつゝある間に、何んとかく、從來の自分の所行が如何にも惡しき事に氣がついて、考へて見れば人に色々心配をさせ、厄介を掛けて申譯がないと考へた、夫から演説會後に居残り、翌日御出立の時、御禮かたぐし御見送りしましたは私でありました。夫から段々考へて見まするに、一として今迄なしたることによき事はなし、トニカク世の中は強き者勝ちと云ふ考でありま

た。全體此地方には佛教と云ふものは少しもなく、佛といへば葬式の事と考へて居る位であるから、頗る珍らしく、少からず興味を感じたと云ふよりも、寧ろ適切に感ぜられた。而して此會を催された青年の熱心なるものも、決して見逃してはならぬ。青年が未だ嘗て試みしことなき、佛教演説を企てしのみならず、當日は施本を爲し、且つ、會後志あるものを集めて、此會の繼續を計るなど、一通りではなかつた。演説會の後六七人の青年が居残りて、頗る満足して謝せられた。今少し記憶に存するは、其時中年頃の年恰好の一人の人が、何となく不安の態度を以て話して居られたことであつた。其夜は停車場の休憩店に案内され休んだ。

翌日は青年の人に案内されて、玉川の附近へ散歩に出かけた。水道の上流の趣を見物した。清らかなる流、白き沙、蜿蜒たる山、如何にも心持のよき景色であつた。玉川を渡りて、向ふの山の谷を、叢をこぎ分けて上つた。淺間の山の上に登つて四方を見回した。斷崖絶壁削るが如く聳ゆる下を、清き河が環流してある、下より眺めても實に絶景であるが、其上に登りても亦絶景であつた。武藏野の平原が茫々として眼下に開け、玉川は帶の如く繞りつゝ流れてある。半日散歩して停車場へ歸つて來たが、また氣車が出なんだ。其間に老翁が娘の衣裳を着て手踊りをし、老嫗が三味線を引きて節を賣りに來た。聞けば一人娘が死んだので、絶望やる方なく、せめての思ひ出でに其娘の着た衣裳をつけて、氣樂に晩年を消する目的であるそうなる。あはれ佛法なき里の寂しげなるかな。集ひ來る小供等に飴を買ひ與へつゝ、出立せんとしたる

した。實は随分色々苦しいことがありました。夫故酒を飲みて夫を忘れやうと試みるのでありました。かく不眞面目であるゆゑ、また苦が増す、夫故夫を打消さんが爲に酒を飲む、と云ふ様なありさまで、其日暮しと云ふ不愉快な生活をして居りましたことに氣附きて、耻かしくてくゞ堪へられず、今まで平氣で遊びて居りたるに、何となく他に出て、人に顔見らるゝのが耻かしき心地して、家の中に蟄伏して居たのが一ヶ月程でありました。何んとかして安心を得たきものと考へ、東京へ出て講話を承らむと欲して、此學舎を御尋ねしました、中々見當らず、丁度尋ね出しました時は講話の終りた後でありました。其時先生は御留守でありましたから、信仰の餘瀝を一冊頂戴して、歸りの汽車中から讀み初めて、幾度となく拜讀しましたが、一章一章皆身にこたえて難有く、何れの章といふことなく皆味を覺えて、漸々佛陀の慈悲の味を感じて、今ではすっかり新らしい生活に入らして貰ひました。考へてみれば今までは如何にも不眞面目な生活をして居りました、酒などもスツカリ止んでしまつて、飲みたくもなく、又味もなくなりしました。との話、私もさうして且つ感じ且つ喜び、如何にも其態度の眞面目なるに、少からず感動して、心中に於て佛陀の偉大なる御力を謝し奉つた。私は今此話を書きつゝある間にも、當時の事を思ひ出して、我々ら懺悔に堪えぬ話である。御一代開書に「坊主は人を教化せられ候に自分を教化せられ候はぬは不思議なることにて候」と云ふ事があつたが、イカにも其通りである。今まで苦悶して居た人が、佛陀の御慈悲で安心を得たる人は随分あるが、かく根本



的に行爲上にあらはれ來つた御佛の御力を拜したのは、稀なる例である。そして吾々自身は、兎角懈怠勝ちであると思へは、實に中里君の言の如く耻つべき極である。中里君はまず「話を繼續して言はるゝには、私は呉服商であるが、從來は人に澤山買はせばよいと考へて居たが、今ではなるべく人の爲めになる様にと考へて、商賣をする様になりました。先日人も人が不用の物を買はるゝ様子であつたゆへ、御不用の物は御買ひなさ方がよろしいではありませぬか、と言ひて、氣が附きて見れば、奇妙な商賣のやり方であつたと思ふたが、却て客は多分に買つて行くと云ふ有様、從來の考ならばかくの如きことをするならば、逆も商賣が出来ぬと考へて居たに、却て都合がよくなると云ふありさま、實に不思議なものであります。先日も村の青年が、火防の演習をするのを見て居れば、誰も水を汲む目にたゝぬ仕事をするのを避けて、水をかける。みづのよき仕事を避ふのをみて、自分の佛陀の慈悲を知らぬ間は、かくの如き有様であつたと昔の事を思ひ出しました」との話、ドノ位眞面目になられたか、心私かに畏敬して、秋になれば、再び會を開くことを約束して別れた、荻野君が隣の室で之をきいて、嗚呼かくの如き信仰でなくては駄目だ、とても從來の様な力のなき信仰では駄目だ、と亦御佛の力の大きなに驚かれた。

これが抑々羽村に於て佛種の下された一粒であつた、約束の如く昨年の秋第二回の傳道に出かけた。東京を離れて田園の間に田舎家の様子、秋の空など恰も油畫の如くであつた。立川己北の林の中を、汽車で通り行くと、樹木が霜に飽き

て、十分に黄葉したありさま、何んとも形容の出来ぬ趣味がある。羽村につきて又禪林寺で演説した。此時も百目木君と同道した、小供、青年、婦人、教員、壯年、老年、堂に満ちた。十分演説して、夜玉川の畔の微かなる旅宿に案内された。安らかに眠りて翌朝醒めて、窓を開けば玉川の朝景色、いかにも氣持がよい。中里君初め青年の人々と散歩して、再び寺に往きて、嘆異鈔の講義を初めた。此第二回は此地の舊家たる指田君が、中里君に導かれて會の幹旋を共にせられたが、君は慶應義塾の出身で、且つ父君と死別して深き經驗を有して居られたが、未だ宗教の味は味はれられなかつたが、嘆異鈔の「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきがゆゑに、惡をせざるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが故に」と云ふ點に至り、如何にも絶對佛陀の大なる點に深く感動されて法に入られた。全體福澤主義の教育を受けた人である故、所謂「皆是先生百戲中」と云ふ點までは分つて居る。世の中は善いと云ふも惡しきといふも知れたものだと云ふまでは分つて居るが、此上一步が正邪の分るゝ點である、であるから勝手次第と出たならば邪見、であるから絶對の大なる力によらねばならぬと出られたならば、直ちに彌陀の本願が、其人の胸にヒシ／＼と感ぜらるゝ。初めは手傳の爲に來られた指田君は、此時の正客となられた。

### 三

是より後二ヶ月に一度づゝ羽村へ行くことにした。而して行く度毎に必ず一人の信仰者を出す例となつた。昨年の新嘗祭の前日から出かけた。此度は弟を連れて出かけた。例の如

く禪林寺にて演説す。弟自己の經驗を説き、我は釋尊の傳を述べて、釋尊の出家を初め、耶舎が苦悶に堪へず家を出つることなど詳かに説く。又玉川の邊の宿に眠りぬ。翌日起き、又窓を開き玉川の清流に臨み、對岸の小丘に對し、秋山落木の曉に向て、深く佛恩を感謝しつゝ朝の禮辭をなす。例の如く亦水道の側を散歩し、寺に歸りて嘆異鈔の一節につきて語る。且此日は天氣よければとて青梅に散歩せしが、青年の一人なる並木善助君が案内し玉ひた。青梅に着き停車場附近の山に上りた、色々並木君と語るうちに、並木君の言はるゝには、私は昨夜の演説で泣きました。思へば實に不思議の因縁でありました。全体昨年先生を招待した發起人は、私と小作君でありました。政教時報を始めて買ふて見ましたは私でありました。之を小作君が見て、二人が思ひつきました。私の知りて居る人が是非耶蘇でなければならぬ様に云ふから、少々之に對抗の氣味でありました。かく演説など企てつゝありしも、本來信仰より來るに非ざれば、耻かしきことには品行脩らず、遂に父に切諫せられ、我家に居るに耐えられず、私かに家出して東京に居りました。夫故第二回は聞くことが出来ませなんだ。然るに友人の勸により一昨夜歸宅しました。しかるに恰も先生が來り玉ひ、殊に昨夜の演説は、釋尊と云ひ、耶舎と云ひ、皆我最も愛する家を捨て、道を求められた心持はひし／＼胸にこたえて、結局佛陀の慈悲によらなければならぬことを感じました。私は此演説を思ひつきたるときは、寧ろ好奇心より起つたのであつたが、中里君が先づ信仰に入られた。先日も中里君に對して、自分の心中の苦を訴へたと

ころ、君は此度實驗を臂めたのであると云はれた。一昨年自分等が思ひ附きたる會の意味を漸く此頃了解出来る様になりました、故に不思議で堪へられませぬと。夫より伊井の別荘の邊を散歩し、深く濃く染め出したる紅葉の枝を折りて土産として東京へ歸つて來た。

十一月の最終の求道學舎日曜講話の後の信仰談話會に、藤井專隨君が水戸より來りて、稻田の禪房を訪はれた話をせられ頗る深く感じた所へ中里庄五郎君が來られた。早速同君に其内心の實驗を話されん事を求めたが、同君は如何にも質朴なる態度を以て、朴訥なる語氣で眞面目に、しかも簡単に、告白されたるは満座頗る感ぜしめられた。そして數日後左の如き書面が着した。前の記事と重複する所もあれど同君自身の筆になるもの亦一層味がある。曰く

拜啓一昨日參詣失敬の段奉謝候其節は御一同諸君に對し、前後錯亂實にきくにたへざることを申しあげ、なにともし汗顔の至りに候。實は先生の御講話を拜聴いたせしより、自分は非常なる罪惡の人間にて、法律にこそふれざれ、勿体なき事ながら或時は親を親ともれもはざる事さへこれあり、つく／＼我がつくり候罪をれもへば、他人に顔を見らるゝさへ不快を感じ、全く暗黒世界に生活いたす様な心地いたし候。寺にて貴著信仰の餘瀝を拜讀せしより、一章一章に身にヒシ／＼としみ渡る心地いたし、恰かも開室の戸を一枚宛開放するがごときを感じられ候。此のごとき味を佛陀の光明と申すならんと確信いたし候。大略如此く有りの儘を申しあげんと存じ候處、御列席の諸君は皆高等なる教育



に従がはせらるゝの士と見受けられ、如此の席上にて無教養なる我がとあもひし爲め、心中何となく恐を抱き、取り止めのなき事申上て、不敬をまかへりみず中止いたし候次第に候。貴舎を辭して車上思へらく、先生の仰とは申しながら、如此席上にて御断するとは、實に恐縮の至りと存し候ゆゑ、寧ろ口を開かざる方よりしと存じ候ひき。しかしながら又心を轉じて考ふるに、不肖のごとき一文不通の者の信心も御列席諸君のごとき高等なる教育を受けられしものゝ信心も、別にかはりはこれなく、皆如來よりたまはりたる信仰に候へば、信仰の御断を致すには何の憶する處もなく、よろしきものならん、如此場合も皆自分の修養の足らざるを、如來より自覺せしめ給ふものと信じ候。同日午後六時宿舎に至り候處、心中何となく不愉快にて、非常に睡眠を催し來り、常に商談に夜更くるを知らざりし小生が、耐へられざるほどに相成、如何にも不思議と存じ候故、翌朝洗面早草觀世音に參拜し、夫れより商業に従事いたし候。今日も滞在致さねばならぬ商用有之り候らひしも、何となく歸宅いたし度き心地いたし、不愉快にて耐まらず候ひし故、昨夜といひ今日といひ只事ならずと存じ、漸やく最終列車に乘じ、車中心配いたしながら歸宅いたし候處、未だ小生より何ともいはざる内に、愚妻の申すには、昨日午後六時世上急病にて、一時は生命も危しと醫師も申候ゆゑ、早速打電せんとあもひしが、夜中は汽車便もなきゆゑ、早朝御知らせ申さん心組に候ひし處、病氣も追々快方にて、醫師もこれまでになれば、生命には別條

なしとの事ゆゑ、御知らせ申さゞりしとの事にて、小生が東京中の事あもひ合はすときは、如何にも不思議と申すの外これなく候。如此の場合、佛陀より我々に方便をもつて知らしめたまひしものと信じて、宣布くなきや、又自然とは義なきを義とすとは、如此き味を申す者に候や、御教示相成り度、尤も前述の如き事は是迄幾度も他人より聞く事は有之り候へ共、自分自身にては初めて候へば、御繁忙恐縮の至りに候へども、思ふが儘をかき連ね御教示願上候次第に候。

之に對して、私は如何にも自然法爾義なきを義とすとの味の大きなを返事した。併吾々は常に結果を見て初めて不思議と云ふて驚くが、夫ばかりではない、全体何の縁もなかりし羽村に往きて、我が傳道が出来るのが不思議、又既に中里君自身の内心が根本的に改革されたのが、何より不思議である。運加上人は凡夫が佛となる是程不思議なことではないと言はれた。病氣の本復位なことは佛の眼より御覽なれば何程のことでもなからう。

#### 四

本年三十日には萩野兄と同道して、是非此信仰的理想郷に出掛けるつもりであつたが、同日は横須賀の軍艦日進に於て追吊會に招待された爲め、二月六日に延引した。此日は萩野兄は差支ありし爲め、藤井君と同道して往きた。時間割の變更せられてあることに氣がつかなくつたため、夕方飯田町を出立して立川にて晚餐を喫し、夜汽車で羽村に向ふた、何處かの山火事か天を焼きて頗る凄まじかつた。羽村の停車場

には青年の人が提燈をつけて、例の如く迎にきてくれられる、此度は會場を變へて上流の方にある一賓院へ案内された。夜は既に八時、聴衆は待て居らるゝ。藤井君は直ちに自分の經驗を靜かに話された。私は此度は此先きの中里君の經驗に因みて、自然法爾の佛の偉大なる力を悉く説きた。其夜演説會の後夜深まで青年の人々が相會して信仰談話をせられたやうであつた。其夜快く休みて翌朝早々藤井君を伴ひて三十分程散歩するつもりで出掛けた。丁度中里君石田君初め四五人の青年の人が集つてゐられた。そこで皆同道して玉川の曉清くして板橋の上にける霜を踏み、河を渡りて向ふ山の麓に往きた。又淺間を登らんとのことであつたが、私は少々大膽な氣味であつた。ソコで青年の一人が言はるゝには、先生は我々を導きて佛陀の許に引きよせらるゝ如く、我々も先生を導きて彼の山の上へ登らねばならぬ、若し此山の麓で終りたならば恰も石田君の開會の主意で終る様なものである、坪と語りて淺間山の上に登りてみれば、一昨年來りたることなど思ひ出て、懷舊の情に堪へぬ。玉川の清流、武藏野の平原當年の有様の如くであつた。後を顧みれば老蒼たる松の樹の梅の間より、遙かに富士があらはれてある、藍の様な空に銀の様な芙蓉峯が聳えてある、恰も其中腹にもやの様なものがむら／＼と起りてある。中里君が説明するには、かくの如き時には確かに午後は風であるとの事。又笠の様に峯を蔽ふときは雨、又麓を雲か掠めて走るときは必ず雪であるとの話。夫から後の山の方へ出て谷を渡り、山道を沿ふて歸路についた。其時同行の石田君が懐かに懷中より小冊子を出して、あ

る箇所を示し、絶對の境には此様な活路がありませんかとの尋とりて見るに馬佛斯祖と云ふ様な題で、五逆罪を作るにあらざれば眞の安心の境に往けぬと云ふことを書いて、丹霞焚佛、婆子燒庵、と云ふ様な極端なる例があげてある。つら／＼其態度を見るに、決して尋常でない。そこで私が尋ねるには、あなた、此度苦悶して居るのでありましようかと云ふた。石田君は實は久しき已前から抱きて居ましたとの事。そこで事に托して他の人を先きに行かしめ、石田君と二人になつて尋ねたところが、家庭上に於ける非常な衝突である。要するに石田君は頗る潔白なる理想を有して居らるゝ、然るに親の意志に従て之を曲げ之を曲げ出来得るかぎりの犠牲をせられたのであつたが、今其極點に達して多年の忍耐の緒一時にされて、今や其極に達せんとするものであつた。そこで私は石田君に説くに、あなたの理想は如何にもよろしい。しかし、善いと云ふも悪いと云ふも畢竟人間の標準で云ふことである。彼の峯は高い、此峯は低い、彼谷は深い此谷は淺いと云ふ位の事。仰て彼の青々したる大空を眺めて見玉へ。瑣細なことに怒り悲むべきではない、人間は人間の中間でこそ善い悪いと云ふて争ふなれど、彼絶對の慈悲の塊たる佛陀に對しては一言なき次第である。先づ須らく他を顧みずして佛陀を仰ぎ玉へと、懇々話して居る間に、先きなる同行者は草の上に坐して、草を鋪きて待ちつゝある。丁度此時中里君は近頃の信仰狀態を述べて、何を見ても愉快である、今迄は自分が少しも曲て居らぬつもりであつたゆゑ怒も發したが、今は少しも怒るべき事はなくなつた、何んとならば人を不足に思ふ丈のことは、



自分の方を探ぐれば必ず其原因を発見すると云ふ。勿論我々  
 兩人の話は知らぬことゆゑ、遠慮會釋もなく愉快氣に語らる  
 る様子、石田君に對しても少々氣の毒な位である。話終りて同  
 行者を先きに往かせて、又々石田君を慰めながら佛陀無限の  
 大悲を仰ぎつゝ寺に歸り、十時頃朝餉と晝食とを合併して戴  
 き食後直ちに其所にある嘆異鈔をとりて、第一章を讀み上げ  
 つゝ、阿闍世の逆惡と苦悶と最後の救済を述べて、共に如來  
 の慈悲の種なきを仰ぎた。話の半ばに立ちてゆかれしが、席  
 に歸られしときは涙が眼に満ちてあつた。私は出立の時間來  
 ればとて寺を辭するときは石田君の家より迎が來た。乃ち石田  
 君と分れ他の青年に送られて歸途につきた。嵐車の中で、藤  
 井君に此事を話して、共に慈光に接せられんことを祈つた。  
 歸京の後、まだ石田君のことが氣にかゝりて仕方がない。筆  
 無性な私が直に再び如來の慈悲を説きて手紙を出した。二三  
 日後に來た返事は次の如くである。

近角先生閣下過日は不計煩悶を打漏らし、説諭懇々、尙ほ  
 亦御教書を賜はり、切々感銘仕り候、恐懼の念存りに迫り、  
 心靈上慥かに一大變化を覺候。嗚呼彌陀の誓願不思議な  
 る哉、思はず知らず佛陀の大慈に浴し、清風匝地灑然として  
 別天地に入るの快感を覺候。余が拭ふて清むべからず、  
 掃ふて散ずべからざる激烈の感清は、一朝の瞬間翻然他力  
 絶對の慈光を感得して、如來の靈光に接したるものが、頭  
 上認め得られぬ中に、大靈のおはすが如く畏こみ申候。熟々  
 この心狀の激變を思ふては、唯驚嘆致すばかりに候、尊師  
 よ、予は人生の苦悶を感じて茲に六年、初めは余が情緒ほ

だされて、非常の不快と世の無情と偽りとを感ぜしめられ、  
 弱者の同情を喚起せしめたり。乍併平和の裡に其日を送り  
 候ひしが、超えて一年、兩親の計ひにて妻を迎へ、夫より  
 一歳間は言ふに忍びず、志士仁人殺身爲仁、余は自らの意  
 見を殺して人に仁をなせり、凡夫の常とは謂へ、余まりの  
 淺聞しさと、自らの不甲斐なきを痛嘆して、其間佛敎の書  
 籍を見た當時は、自分の弱きを非常に感じたので、我を救  
 ふは必ず自力宗であると信じ、殊に一休全集を嗜んで、

有漏地より無漏地に歸へる一休み

雨ふらばふれ風ふかばふけ  
 の歌は我が信仰の全幅として居た、故に、禪書を靜慮して  
 は眞偽の境を一舉に決せんと覺悟した。或る時は非常の活  
 劇を現じ、顧みて彼の一舉なかりせばと思ひ回へす事もあ  
 れば、又之でこそ一點偽りのなき男子の舉動なりと自惚れ  
 て考へ直して、疑念晴るゝが如く解けざるが如く、殆んど  
 苦悶の絶頂に達し、夫ても平和は理想であつた。この上は  
 不見不聞不言と消極的平和を求めようとして殆んど三歳口  
 を開かず、本年に入つて一口も口をきかず、我兒の惡徳と  
 いへる敎育の書物を見ては、親が悪るい、これだと孔子も  
 畢竟人の兒を傷ふ先生ではないかと、かゝる内にも社交は  
 極めて温かたにして、殊に求道會の發起もこの煩悶の間に成  
 りたつたので、諸氏とは實に肉身の親しみ、これ至極妙に  
 候。之と反對に家庭は益々荒涼を極め、親には遂に堪忍  
 の緒は切れたと叫ぶてある、罵るである、嘲るである、併  
 し余は惡はせぬから懸念する處がないと、聊か善事は狂げ

ぬ決心をもつて居つたのが、遂に親族會議とまでなつて、

余は成り行き次第不得已と覺悟して、一點の謝することな  
 きのみか、彼の暴言は飽迄忘るゝ、あたはず、虐王に報ゆる  
 最後手段あるのみと決心し、例令は南洋の孤島に眞珠を拾  
 るはんには、誤つても恥辱の生活に陥ちゐることなから  
 んと、之が二月五日の夜までの経過で、六日には當夜が即  
 先生方の出張せらるゝであつた故、朝より出てて工夫して  
 居つたが、夜に入れば御演説を聞いたが何分落ち入らず、  
 非常の疲れが眼を促して、フト藤井君が親が何とかして  
 と言はれたのが強く耳に響いたので、解散後色々話して  
 禪が面白い、他力は悲觀だなど、放言して歸つたが、家  
 に親族一同滞留せられて、翌朝即七日の朝家を出られるの  
 でなかつたのが、余は逃げるが如く先生の下に馳せつけた  
 か不思議の縁、夫れが寺に居れば呼び戻さるゝであつたの  
 が、散歩に伴はれて立つたが愈不思議、一方は一步一步と  
 遠く、一方は一步一步と接近して、山路の迫りは恰かも佛  
 陀救済の御手にすがり、一步は一步と靈境に引き入れられ  
 て、慈悲の御恵みに抱入せられたやうな奇觀を感じたので、  
 昨晚迄胸中の一大悲劇を夢みて騒がれて居つたのが、扱て  
 己れ如何程善人たるやと夢醒めて見ると、慚愧交々あり、  
 嗚呼我れ善なりと確信して居つたのが抑々迷ひの根であつ  
 たと、絶對他力の偉大が感ぜられて、彌陀の誓願不思議に  
 助けられまゐらせて、往生をは遂ぐるなりと信じて云々、  
 吁々畏こしゝ、余は信を起す前に、彌陀の不思議を感じ  
 て始めて信を得たる心地いたし候。妙なことは奇遇の迫れ

るさつ那に、救済の御手のかゝりし事が六日より七日の午  
 前迄に善と惡とが兩方から交々相迫まり來りし事にて候、  
 一機一境相制して予が身上に結ばれたる奇縁は如何にも不  
 思議、次に又胸中爽然として一時に霧散じ、今が今までの  
 感狀あれ程つよき感狀が、一切洞然明白と相成り候事、  
 實は妙とおもはずには居られぬ、先づ以つて信仰生活の第  
 一日程に昇りしかと、心から嬉しき泉の湧きあづるやうに、  
 佛陀を樂しみ申候。七日には所用後、又寺に行きて中里君  
 等と半日を消して、互に符節を合はすが如く興味を覺候。  
 御敎示せられ候書は、みな机上に備はり居り、熟讀いたし  
 候處、一々手にとる如く、以前に一讀の折は格別に感せず、  
 面白い、之は尤もだ位の事でした、今度は實驗の味津々と  
 して、信仰前後に迫り來れる光景には得もいひ得られぬ味  
 を感ぜられ候。これだけでも信なき行は淺ましきこと、自  
 覺いたし候、是亦重ねて御詫び申上げ奉り候。頓首  
 嗚呼又石田君は新に慈光の攝取を蒙り玉ひぬ、彌陀の誓願不  
 思議なるかな佛法不思議といふことは彌陀の弘誓になつた  
 り、羽村傳道の事は徹頭徹尾私には不思議ならざるはなし私  
 は畫の如き愛すべき此村に下されし佛種の長へに傳播せむこ  
 とを御佛に祈り奉る、



## 講 話

## 金剛の信

近 角 常 觀

今日出して置きました題は金剛の信と言ふ題であります。金剛の信といふことは佛教に於て常に用ゐて居るのですが、併しその信仰のうちの如何なる點が金剛の信で、その信仰としての味はどうかといふところがこの金剛の信であるか、皆さんも御承知でせうが、この語は善導大師が、この心深信せること猶し金剛の如しと言はれた、少しも外界の障の爲めに破られることのないダイヤモンドである、さういふ意味に於て信仰の動かざる堅き處を金剛の信といふのである、この善導大師の言葉を親鸞聖人が教行信證の信の巻の始の方に於て詳しく書いてある、平日も皆さんが金剛の信を御聞て御座るが、金剛の信は外の物の爲めに破壊せられぬと言ふその説明は、二河白道の喩に於て實によくあらはれて居る、二河白道は信仰の動かぬ點に於ては有名な喩であつて、この喩は吾々の信仰の有様をよくよく言ひ表はされてある、親鸞聖人の信巻に種々あげてあるが、信の巻のうちに最も信仰の状態について切に表はされてあるのが二つある、その一は彼の阿闍世王の喩で、他の一は即ち今の二河白道である、何てこの比喩がのせ

であるかと言ふに、その味が實によく書かれてあるからである、この喩は信仰としては誠に味が深い、信仰が微塵も動亂せぬ、これが喩の要點である、親鸞聖人の實験の要點がこれである、

先づ信仰といへば割合に輕るくつかふ、親鸞聖人の絶對他力の深いその味は違ふ、佛を信じ心のうちに喜ばして戴くたしかな喜びは蔽ふ可からざるものである、人生の問題につきあたつては、心のうちの佛はすぐたける、心のうちの自分てこしらつた信仰は忽ちこわれる、さういふものではない、人間は平日の心のうちに自分にひとつもとどころなしに内は頗る柔であつて外は剛に見せかける、人間は總て偽善の行である、吾々は一としてたのむべき餘地はないのである、それが自分で自覺されてくるとは、これは自分丈で起るのてない、これ全く佛陀絶對の慈悲のために永久の生命を得るのである、一度この永久の生命を得れば、たとひ如何なる事が起つて來ても、奪ふ可からず、亡ぶ可からざるものである、その例は法然上人が流罪のそのときは、念佛停止であつた、南都興福寺の僧徒等朝廷へ奏聞して、上人始めの弟子達は皆死罪流罪に處せられたが、上人は遂に流罪の身となり、土佐の國へ御出達となつたときは、實に御年も非常な御老年てかの遠國へ流罪となられる、御弟子の人々之を見て皆袖をしぼりなき悲んだが、そのとき、法然上人は唯從客として、南無阿彌陀佛のありがたき事をのみ申しさされた、御弟子方は申し上げて、今日は御流罪とならせられた御身の上なれば御念佛の事御遠慮なされてはと、時に上人は、たとひこの源空

を死罪に處せられる、ともこの念佛のみはかはらぬと、誠に鼎鑊が前にぞむもこれのみはやめられるものでないのである、他人來つて君の信仰はまちがひである、と言ふても變へらるゝものでないのである、昔し闍明と言ふ講師が、信仰ある老婆にむかひ、婆や御前の言ふことはちがふぞ、それでは佛の御傍へはゆけぬぞと言はれた、がそのとき老婆は答へてあなたのやうな偉い御方が仰せられるならば、自分はとてもたすかるものではござりませぬが、佛はかゝるものを救はれると聞いては何とも難有いと言ふた、これ一見矛盾のやうであるが、こゝが金剛の信仰は外界によりて更に動かされるものでない、どうあらうと、こうあらうと、理屈は理屈を以て破れ感情は感情を以てくづれる意志は亦意志を以てこわれるのである、信仰は感情だと言ふもそんなものなら直きにくだける、絶對他力の佛の力は、外界や自己の力で動くものでない、

信仰の味は困難が出てくれば出てくる程愈深く感ぜられる世間の事が自分の氣に合ふときはさうもないやうであるが、人世のかなしき事、不幸な事が身に心にせまつて來て人世の光が覆はれるときになればなる程、信仰の光は益々表はれるものである、自分勝手な信仰は、苦しい、まさかの場合には少しも間に合はぬ、然るに絶對佛陀無限大悲より賜はる信仰は、もうその一寸も動けぬ、その動く事の出來ぬ信念を金剛の信と言ふ、

二河白道の喩は、今の信念の破れぬ事を言はれたものである、平生御聞の方は愈この深い味を味はれたく又始めての方

は益々この味に心をむけらるゝやうに望みます、親鸞聖人の教行信證の中の信の巻の始めの方から三心の事が説いてある、その第三番目には三者回向發願心とあつて、佛の誠を藥のやうに身に用ゐて味ははれた實験がのせてあるその下にこうある、

この心深信せること金剛の如くなるによりて一切の異見異學別解別行の人等の爲めに動亂破壊せられず

とある、佛陀を信する事ダイヤモンドの如くである、一度深信すれば、たとひ異つた見解、異つた學理、別の解釋、別の行を以て居る人等に逢ふても、一分も動亂せぬのである、唯一心正直直ぐに進む事のあるばかりである次に、

唯是れ決定して一心に捉へて正直に進んで彼の人の語を聞く事を得ざれ、即ち進退あつて心に怯弱を生じて廻顧すれば道に落ちて即ち往生の大益を失するなり

と、人の爲めに寸毫も躊躇せず、回首せず前程の一路に向ふのである、然るに茲に人來て信仰者に向ふて難題を言ふ問ふて曰く若解行不同の邪難の人等ありて來りて相ひ惑亂して或は種々の疑難を説きて、往生を得ずと言ひ、或は言はん、汝等衆生曠劫より已來及び今生の身に意業に一切凡聖の身の上に於て具さに十惡五逆四重謗法闍提破戒破見等の罪を造りて、未だ除盡する事あたはず三界惡道に繫屬す、云何ぞ一生の修福念佛し即ち彼無漏無生の國に入りて、永く不退位を證悟することを得んや

と、全体人間は、古から今生に至るまで、一切總ての人が十惡五逆の罪をつくる、その罪は如何にするも消えないのであ



る、然るに僅か一生の念佛をするなど到底駄目な話である、君はそんな事で安心してるなんて、そりやなんであるか、と言ふ様に他の人々が来て種々と説きたてる、原來向ふが理屈を以て来るのにこちらも理屈を以てむくひるのは唯是必覚理屈である、理屈に過ぎぬのである、そこで次にこうある

答へて曰諸佛の教行は數塵砂に、越へたり、識を棄くる機縁は情に隨ひて一に非ず、譬へば世間の人眼に見つ可く信ず可きか如きは、明の能く闇を破し空の能く有を含み地のよく載養し水の能く生潤し火の能く成壞するがごとし、かくの如き等の事悉く待對の法と名づく、即ち目に見る可し千差萬別なり、何に況んや佛法不思議の力、豈種々の益なからんや、

と云ふ言ひ方である、全体佛の教はその數塵砂よりも多く、世間のものでもこの眼でものを、茲にコップがある、これは水である、決して疑ふ事は出来ぬ、チャン／＼と言ふ音を聞いて誰れも疑はぬ、大地に樹が生える、水がものを濕ぼす、火の爲めにものか焼ける、見易い事である、これ等は皆相對界の現象である、何も理屈を用ゐずして明である、如何に泥んや、佛法の益の種々ある、唯是佛法不思議である、こゝが信仰の強い動かぬ處である、その不思議は彌陀大悲の弘誓になづけたり、絕對の法である、無限の慈悲である、それから今の次を讀みます

隨ひて一門を出づるものは即ち一煩惱門を出づるなり、隨ひて一門に入るものは即ち一解脫智慧の門に入るなりと一の難有い法をうれば、即ち一の煩惱が消ぬる、味はなけ

れば解らぬ、

こゝを以て、縁に隨ひて行を起して各解脫を求めよ汝何を以てか、乃し有縁の要行に非ざるをもちて我を障惑するや、

各縁に隨ひ根機に應じてその行を起し、解脫を得ればよい、人を障惑するに及ばぬ

然るに我の所愛は即ち是我有縁の行なり、即ち汝が所求に非ず、汝の所愛は即ち汝が有縁の行なり、亦我が所求にあらず、是故に各所樂に隨ひて、其行を修する者は必ず疾く解脫を得るなり、行者當に知る可し、若し解を學ばんと欲はゞ凡より聖に至り、乃至佛果まで、一切障りなし、皆學ぶ事を得るなり、若し行を學ばんと欲せば必ず有縁の法によれ、少しく功勞を用ふるに、多く益を得ればなり

と御前は信ぜられぬは縁がないのである、汝の欲する所は理屈なりと何なりと信するがよい、吾れはこの法が難有から、難有のである、若し學問的に研究するならば、研究するがよい、自分は自分の信する道を進むのである、少しく心をかたむければ屹度利益があるのである、信仰は理屈道理ではない、物を見て見えなれば、見えただのである、我信する道は、どんな事があつても動かぬ、金剛の信仰に至つては、外の人々が手をもち足をもちて動かせんとするも、そこに吸ひつけられ、うちつけられた有様にビリとも動かぬ、動かぬのである、古から宗教には迫害があるが、それ等には毫も驚かぬ、是を以て二河白道の喩は、その毅然として心の動かぬ處を言はれ

たのである

今更らに行者の爲めに一の譬喩を説いて信心を守護し以て外邪異見の難を防かん

外の人の爲めに更に動かされぬと言ふ爲めに喩をとかうと、

人ありて西に向ひて行かんと欲するに百千の里あらん、忽然として中路に二河あり、一は是火の河、南にあり、

一は是れ水の河北にあり、二河各濶さ百歩、各深さ無底南北に邊なし、正しく水火の中間に一の白道あり、濶さ四五寸許なるべし、この道東の岸より西の岸に至ること亦長さ百歩、その水の波浪交り過ぎて、道を濕す、其火熾亦來りて道を燒く水火相交りて常に休息する事なしこの人既に空曠の迥かなる處に至るに、更に人物なし、多く群賊惡獸のみあつてこの人の單獨なるを見て、競ひ來てこの人を殺さんと欲す、死を怖れて直ちに去りて西に向ふに、忽然としてこの大河をみる、即ち自ら念言すらく、

この河南北邊畔を見ず、中間に一の白道を見る、極めて是れ狭少なり、二の岸相去る事近しと雖も、何によりてか行く可き、今日定めて死なん事疑はず、正しく到り回らんと欲すれば、群賊惡獸、漸々に來り逼む、正に南北に避り走らんと欲すれば、惡獸毒虫競ひ來て我に向ふ、正しく西に向ふて道を尋ねて去らんと欲せば、復恐らく此水火の二河に墮せん事を、そのとさに惶怖すること復た言ふ可からず、

嗚呼人生の事、詢にこの喩の通りである、顧みて吾々の心はなにかむれば實に活けるこれである、吾れ今回らんとするも死

し、往かんとするも死す、人生の問題につきあたつて進退維れ谷まり、四方塞り來りては、嗚呼思ひきつて破天荒の事を爲さんか、爲す能はず、今や入る可き餘地なく、出づる可き道なし、煩悶懊惱の極みである、言語思慮に絶する

即ち自ら思念すらく、我今回らば亦死せん、住まらば亦死せん、去かば亦死せん、一種として死を免れざれば、

我寧ろこの道を尋ねて、前に向ふて去かんとす、この道あり必ず應に度る可し、この念を作す、時に東岸に、忽ち人の勸むる聲を聞く、仁者但決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん、若し住まらば即ち死せん、又西の岸の上に、人有りて喚て言はく、汝一心正念にして直ちに來れ、我能く汝を護らん、衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ

もう行く可き道は、唯前程四五寸の幅の道あるのみ、何てか分らぬが、もうこれを尋ねて往くと決心した、嗚呼これ信仰の第一歩である、どうでもこうでもこれを往けと心をきめたるのときに、人ありて東の方の聲して、汝往け、既に道あれば大丈夫往ける躊躇せず往け、その道を眞直に進め、今躊躇すればもう命はない、と聞けた、と思ふと又西の方の岸に、再び聲がして、汝一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん、汝水火の難を畏れず、眞直に進み來れと、此の人前後にかゝる聲を聞きつけた、もう瞬時の猶豫はない、

この人既に此に遣はし彼に喚ふを聞きて、即ち自ら身心正當にして、決定して道を尋ねて、直に進んで、疑怯退心を生ぜず、或は行く事一分二分するに、東の岸の群賊



等喚ふて言はく、仁者<sup>ナシ</sup>回り来れこの道峻悪なり、過ぐる事を得ざれ、必ず死せんこと疑はず、我等衆て惡心ありて相向ふことなし、この人喚ふ聲を聞くと雖も亦回顧せず、一心に直ちに進んで道を念じて行けば、須臾に即ち西の岸に到りて、永く諸難を離る、善友と相見て慶樂することやむなからんが如し、これは是喻なり、

この前後にその聲を聞いて、心に往けるにちがいないと信じて、その人一二歩その白道を前進する、するとうしろから群賊共喚んで、そんな處はあぶない、決してもう悪い事はせぬから回り来れと言ふ、この所がこの喻の要點である、今や滿の信念を以て一直進みゆくまでこぎつけた、もうその人は躊躇はない、今となつてそんな群賊等の甘言を聞くひまがない唯彼の迷はしと喚びの聲を信じて、一心専念わき目もふらず進み行けば、しばらくにして、今迄の諸々の惡難をのがれて忽ち、彼の岸につきよき友と相見えて手を握りよろこぶことが出来るのである、極樂無爲涅槃の至樂境に入つたのである即ち今のは喻である、その喻の意味はこうである、東の岸と言ふのは、即ちこの人生娑婆の苦しい火宅である、西の岸と言ふのは、即ち彼極樂無爲の寶國である、先きに群賊惡獸の襲ひ来り又詐り親むと言ふのは、即ち六根六識六塵五陰四大この身の心である、無人空迥の澤と言ふのは、即ち常に惡友に随つて眞の善知識に値はず、茫漠たる原頭のやうなもの水火の二河とは、即ち吾々人間の貪欲愛樂は水の如く、瞋恚憎怨は火の如くである、中間の四五寸の白道はこれ佛の力なり即ちこれ信仰である、吾々は信仰を得ればとて、むさぼり

怒りの心の起らぬと言ふ事はないのであるが、而も如來清淨の信念は起るのである、欲の波さか立ち、怒の焰も來る、その惑亂のうちにも佛の大慈悲はかすかにあらはれ給ふ、白い道がマートつき通つて居る、然るにその道は常に常に火の爲めにやかれ濕される、その種々の苦惱のうちに一步一步進みゆくのである、東岸の人の聲と言ふのは、即ち釋迦如來の佛説である、群賊等喚び回すと言ふは、即ち別解別行惡見の人等妄りに見解を説て相ひ惑亂し及び自ら罪を造つて退失するに喻へたものである、西岸の人の聲とは、佛陀の御呼び聲である、今釋迦彌陀二尊の仰に従ひ奉りて、遂に水火の難をはなれて極樂に往生するのである、

信仰は四方の境遇が、どうしてもそとしてゆかざればならぬやうになるのである、信仰があるから怒る心が起らぬと、そんな事はない、私は皆さんに信仰の御話をして居りますが、自分の心は信仰以前と少しも變らぬ、種々欲も怒りも起りますが、唯その氣のつくと言ふばかりである、自分はわるい事に氣がつくと言ふ事である、仰いて大空を見れば佛陀廣大の慈悲を見れば、人間のよきも、わるいも、そんな事は言ふ事は出来ぬ、誠に頭の上らぬ事ばかり唯佛陀の慈愛一つてゆくばかり、自分の自覺である、腹立てたときもあさる、彼の金剛の白道は水火の爲めに燒かれずさらぬ、唯まつすく一心進めば屹度行きつく、四五寸の白道は白は、黒に對す佛陀の眞白なり、懷る可からざる、亡ぼす可からざる金剛の信である、信仰は平安の時には信仰あつて、まさかのときにはないものであると思ふが、それはさかさまである、利益のないとこに

## 實 驗

## 懺 悔

無 漏 田 貢

始めて信仰が見えるので佛陀の力と言ふことを本として交らずしては本當の交りも出来ぬ、唯世間一通の交なれば到底續かぬものである、佛陀の力を以て交れば、たとひ如何なる障礙あるも、更らにかはらぬ、これ即ち金剛の信心から出るからである、迷ひ暗みの自分が幸に佛陀の光明に接して茲に安心を得さしもらふのである、自分の心に欲心をもやしたればとて忽ち欲の水がひけば、茲に金剛の白道があらはれる、こればかりは自分に味ふて始めて分ること、理屈でないも、如何なる苦みの渦中にあつてもとり代への出来ぬものは唯この信仰である、皆さんもどうかこの金剛不壞の信心を味はれになつていただきたい、信仰の問題と人生の問題とは別のものでない、政治家なればその信念を以てその土臺とし、實業家なればそれを以て實業の根本としてゆく、總ての人生の問題も皆この信仰の堅き大地盤の上に立ちて屹度ゆけるのである、自分で言ふときは偽ばかりである、そらごとたわごとのみみちて居る、然るに佛陀大悲の地盤の上に立つときはとうしても動けぬのである、佛陀の強縁によつて動く事が出来ぬのである、私のうちに、信仰を得た人が酒がすすてのむ、すると人が非難をした、その人は殘念でたすらぬと言ふて遂にすつかりとやめられた、遂にこの酒をぶちくたいてやめられた、もう酒をのまぬとの決心は、皆是事實にあらはれたる金剛の信である人生の總ての事佛の力によりて進みたいと念ふ、今の金剛の信の變らぬと言ふが極惡點である、信せず居られぬ、變る事が出来ぬと言ふが今の金剛の信心の深い味である。

昨年十二月二十七日朝、無漏田君來訪し玉ひ、熱涙を澀ぎて自己の經歷を述べ、内心の經驗を告白し、其前々日佛陀の慈光に接觸して胸に充てる歡喜の情を披露し玉へり、爾後信念熾んにして燃ゆるが如く、一月二十九日 信仰談話會に於て黒田最勝君が熱烈なる告白の後、君亦胸中を披きて沈痛なる懺悔を爲し玉ひ、滿座爲めに感動して歔歔咽咽袖を濕さるはなかりき、本篇は君、予の囑に應じ其告白の儘を筆にせられしもの也、予題して「懺悔」と云ふ予は此の如き告白をきくときは恰も生ける佛陀の御聲を拜するが如く感ずるもの也、然るに近時兩君の告白を傳ふるもの此等眞摯なる懺悔に對して敬意を表するの念に乏し、是予の遺憾とする所なり蓋し懺悔文中自己の罪惡觀極端に達したる時の言を以て直ちに通常の對話若くは事實上の報告と同一視するは非也、夫懺悔は人に對するの言に非ず、佛陀に對する慚愧なり讀者幸に之を諒せられむこと、近角常觀識私は寺に生れ朝夕佛の德音にとりまかれ、佛の恩賜によりて血流れ肉肥を骨かたまりものであります。永劫生死の大



海に罪を抱き悪を負ひて無明の谷底に走り居りたるものが、  
 値ひがたくして不可思議なる慈光に値ひ參らせて疑はむとし  
 て疑はれず、捨てむとして捨てられず離れむとして離れられ  
 ざる力を感ずるに到り、唯佛の力のいかなるかは我れながら  
 あされるばかりであります。

私は舌がまわり手が動きそめて、初めて教へられたのは御  
 經と佛に禮拜することでありました。私は郷里の中学校へ入學  
 しても、朝夕の勤行は懈怠したことはありません、もし怠つ  
 たならばその日は不愉快でありました。

漸々社會の風に吹かれまして、坊主の子であるといふこと  
 が嫌厭になりましたが、家庭で常に教訓せられた佛恩報謝は、  
 私の心の底に刻みつけられ寺に生れて佛のものを養育せられ  
 たから御法の爲に働かねばならぬといふことは動かされぬ  
 根柢となつて居りました。それであるから何んといふ外のも  
 のになると云ふことはどうしても出来ないと云ふ考へがあ  
 りました、故に私は坊主はなににするものであるかといふこと  
 が疑問となつたのであります。しかし坊主は葬式と法事とが  
 本職であつて、名のよい乞食であるといふ考へられなかつた  
 であります。そして説教は地獄極樂のことや、無常のことば  
 かり云ふて、罪惡深重の凡夫五障三從の女人と云ふて、人殺  
 したものを責める様な心地がする様に考へられました。それ  
 で私の天真爛漫な佛に對する心は破れ初めたのであります。

三年級の頃に、兄が政教時報や新佛教其他新聞を送つて呉  
 れましたのをよみまして、宗教問題や坊主の腐敗墮落を初め  
 て知りましたから、茲に三界の大導師人心の大慰藉者である

ふけれども、自己の心の底に堅く築かれた何ものか破れな  
 いものがある。しかし私には決して何にかわらない、唯身  
 心平かならざるものであつた故に、私は教會に於て敬虔なる  
 祈禱を捧げたけれど、心中に益々或物の力がとれなかつたの  
 であります。

斯くして心に蔽はれたる或物の力は、私が基督教に關係が  
 深くなるだけ廣がりて、遂に苦悶の果て骨はかへるも肉あ  
 り血あり精神ある自分がかへらぬと、心に深く刻まれたる郷  
 里にかへらねばならぬ事となつた。其時は私の心は又て千々  
 にさかれ、骨は微塵に碎かれる様でありました。東京へ来る時  
 は父母に告別して、世界を踏破し人心を洞觀せんとした希望  
 が、幾千丈の谷底になげられたのだから、新橋に乗り込むだ  
 時私は肉と骨との荷物であつた、墓場に送らるゝ死体であつ  
 たのであります。郷里の停車場に下りて我が寺の門に入る時、  
 丸て旅の様な心地がしました、母に對して私は何にも云  
 はれなかつた、母の顔を一目見て私は伏せて、母が「よくか  
 へた」と云はれたが私の臟腑を抉ぐられた様でありました。  
 それは三十六年の暮でありました。私はその後は一室にこも  
 つたが、自分の周囲のものが私を嘲けつたり笑つたりする様  
 でありました。書物を亂し障子を破り無邪氣なる愛弟の我に  
 は寸鐵でありました私は三度の食事を喰ふにも、時ををくれ  
 て人の居ないのを見計ひて、丸て人の家に盜賊にでも入る様  
 でありました。母のなぐさめたまふ詞は春風の様であつた。私  
 の心は堅氷の如く、恰んど人の心はなく肉と骨とのかたまり  
 であつたのです。確かかへつて四五日後であつたか、私は死

神聖なる天職を知つて、私の心は火山の様でありました。彼の  
 小川宗や加藤博士の宗教改革論をよみましてから、私はいよ  
 々々狂熱し初めたのであります。こゝに自身をかへりみれ  
 ば、あはれなる民の生血をすゝり肥肉をあさつて居るのであ  
 る、そして哀憐悲嘆の極みなる人の死に接して悦べる、實  
 に惡徳の極である、破廉耻の骨頂である、錦の衣は信徒が信  
 心のあふれた感謝の餘瀝にあらずして、貧愛の幻影であると  
 思ふた時に、起だずに居られぬ、活動しなければならぬ、  
 遂に私は學校にありてゆたかに無辜の民を犠牲として居らぬ  
 と考へたから、學校の第四時間課業が終ると直にかへつて、  
 これより世界に漂游して苦學修行して人心の機微に接觸して  
 佛教改革者たらむと決心して、郷里に向つてかへり父母に生  
 別を請ふたのであります。この時私は精神的に自殺して居た  
 のであります。私には如來大悲の恩徳は、身を粉にして報ず  
 べし、師主智識の恩徳も、骨をくださても謝すべしと云ふ御  
 和讃は、私の生命にかへられた金言でありました。そして私  
 の心に父母兄弟も刺し殺し、郷里と云ふものは忘却したので  
 あります。例へ許さずとも脱走するの勢なれば、父母は靜に  
 戒めて許されましたから、私は東京へ來り横濱に到りて、社  
 會の恐ろしき怒濤に蹴られ、人生の悲惨なる暴風に漂はされ  
 て、遂に基督教徒の仲間に入りましたが、どうも家庭に於て深  
 く印象せられた佛教の精神は拭はれなかつたのであります。  
 此の時に私の心には何にか希望ある光が遙に感ぜられた、し  
 かし私の精神に少しの影響もなかつたのであります。基督教  
 の仲間にと居ると、漫禮をうけるとか、傳導學校へ入れるとか云

を決した、その時は實に大膽であつたが、私は常に云ふて居  
 つた、人の活動の最後の手段は死である。私にはあらゆる  
 ものが敵であつた、天地の間に肉と骨とすらなく事は出来  
 ぬ、私は祖父から貰つた鋭利なる短刀のさやを拂つて、將に  
 胸腹をかき破らむとした刹那に、六才になる無邪氣なる愛弟  
 に來られて、手早く短刀を陰して愛弟を抱いて靜に思ひかへ  
 したのである。嗚呼私はその愛弟が居なかつたならば、私は  
 無慘なる死をなしたのであらうと思ふ時、私の血は激し冷汗  
 背をしたします。私の死を決した時は丸て悶絶せる萬有は、  
 毒蛇の如く、親もなく兄弟もなく恐怖なく疑ひもなく、死が  
 私には唯一の隱家であつたのであります。これが私の憂惱斷  
 腸傷思の最極點であつたのです。その後私は再び苦惱をくり  
 かへし、年末遂に自坊に居られずして、無斷にて家をでだし  
 友を訪ねて有耶無耶混沌の内に新年を迎へ、家郷の父母を忘  
 れ不快と不平とをもつて、三十七年の第一日は初められたの  
 であります。私は今思ふと、肉を喰ひ血を吸ふ惡鬼に襲來す  
 る様に感じます。一月の終りに、汽車は私を如何なる意味か、  
 再び新橋に送りました、そして私は不平の塊となりて、罪も  
 なき兄に報ひ弟を苦しめ友を嘲弄して自己の不平を洩し不平  
 をもてすぐす内に、三月になりて學校の入學に急ぎました、  
 漸々不平不満になれたる私は、野心の鬼となり虚偽の魔とな  
 りて、私は人を籠絡して悦び社會を欺きて慰み、實に鬼とも蛇  
 とも魔とも例へられざる化身となりました。私は父をあむざ  
 き母を誤魔化し兄も弟も眞實らしく相談した事は、必ず恐  
 るしさ虚偽の塊りでありました。社會に對して私は快活に



心れきなく接して、腹には炎々たる野心と欺罔とが謀られたのであります。一度物を買ひたる商店は、十年の得意の如くに思はしめて悦ぶと云ふ有様でありました。私の心は順風には帆をあげ、逆風には帆をまきてすべて時と處は千變萬化の私を見るのであります。斯くの如くにして私の心は常に不快愉であつて黒雲に蔽されてあるのです。私は學校に出て居たが、眞面目に心から勉強したことは一分時もなくつたのであります。なんとなく雲霧にとちこめられて暗鬱たる心には、少しも記憶などはせられなかつたのであります。かゝる苦悶煩累不平野心の化石したる惡魔惡神の如き、冷かなる氷の如き、石の如き心の微塵の一つ一つに泌み渡りたる佛の不可思議光と、我が母の、我が骨柔軟なりし時、肉固らざりし時、骨肉に徹入せしめたまへる佛恩の深遠なることは輝いた、嗚呼我慟哭するのみ！、我れ何をか云はむ、佛の大慈光は我が心身に間一髪をいれられざる迄泌み泌みていたまひしものを。嗚呼我は如何なる世界の詞をもつて懺悔せむ、……懺愧！、懺愧！、ア、懺愧！、我れ何をか言はんや、我れは我を抱きて佛を遠く遠く仰ぎたり。然るに機到達し業つきてか、明治三十七年十二月二十五日、不可思議なる慈光に接して私の微塵の肉より雲霧去りて歡喜忽然として來り、私はその我れなるを疑ふほどに精神は新生命を得て狂喜するばかりでありました。私は心平に天地美はしく、丸て自分が自身をあきれる様でありました。私はもう苦まむとして苦しめられず、疑はむとして疑はれず、世界は擧つて宗教を捨てむも、私にははなれない力があります。八萬四千の教門は滅するも、幾萬の寺

塔は滅亡するも、佛の力は私の血の流るゝ間にはなれざるもののであります。私は其後疑はむとして居りますすが疑はれない、宗教と云ふものは愚夫愚婦の教へたと考へむとしても考へられない、極樂はない、地獄はないなど聞いても一切氣にはかゝらない、佛の力は何の位なものかわからないであります。もう實に……

佛教改革と云ふことは、實に私の精神の無始無終の只一度一大革命であつたのです。私は自身の心が毒蛇惡龍蛇蝎奸訴の事をどうして虚飾虚偽の法昌の私が云はれるかと、自分ながら氣拔でもした様であるまいかと思ひます。私は例へ氣拔氣狂と云はれても、佛の力をはなれることは出来ません。私は十二月二十五日の夜私の友達へ死去したと報知しました。私は佛の光で地獄の苦患も知り、役にもたない頭腦で佛をこそだあ、だと作つて居た。私は死んだのであります、佛を解釋した顔して居つた私は死んだのです、極樂を一生懸命でさがして居たつまらない我は死んだのです。十二月二十七日の朝私は母から次の様な手紙を受け取りました。

追々寒さにもむき、皆々様御身大切に御勉強願ひます。不常の身なれば弘中の奥様の様に若いもあてにならぬが、私共何時どふなりても、兄弟六人御法をすゝめあい、皆手をひき御淨土に参りて下さる様にたのみます。皆男子なれば女子より教導が出来ませう。されども道心なければ何程學問さしても御恩報謝が出来ませぬ。第一我が身に金剛の信心を戴かねばなりません。他家の人とは事ちがい、寺の物一日無駄に費せば、三千世界の人を殺しその財産をとり

たるより罪が重いと聞く。誠に生れ初めしより錢一文米一粒まで佛物、死すれば安養の御淨土、此の廣大は御厚恩をうけながら無駄に月日を送らぬ様、如來様を丁寧にお敬い申、日曜日などには七祖や御聖教などの佛書をよみて下さる様にたのみます。大無量壽經は「この様なものを、觀無量壽經は「このまゝたすける」、阿彌陀經は「まぢがひない」の御慈悲があればこそ、この無間地獄の底の底のあびの苦みをうける私を救けて下さるゝありがたさ、この御恩を報じ様もなければ男子をもつた仕合には教導して下さる様、耶蘇教の友達を佛教にひき入るゝ様たのみます。信徒より高い御米があります、物買ふにも一錢二錢もねざる人心の、一俵何圓と惜げもなくあげて下さる勿体ない。どうか我に信心決定して門徒の人を御淨土につれて参めて下さるゝ様願ひます。私も此節は寺参りも充分になりませぬ。されども何事につけても喜ばしてもらいます。此世から如來様の御かげでたのしく、未來は地獄の恐ろしき苦しみをうける身が、御淨土のたのしみとほありがたい事云ひつくされず。あまりかさなる様なれども、佛物をいたゞき地獄に行きたら恐ろしき事を思へば筆にもかきつくされず。御承知の通り生れがたい人間に生をうけ、あひがたい佛教にあはしていたゞきたれば、眞實の信心胸に一杯あまりこぼれ、姿にも口にも佛智の御かけとなりて下さる様願ひます。朝夕の御勤にも祖父様の様に三帖の御和讃五帖一部の御文章様をくりよみして御意見にあふて下さいませ。

十二月二十五日認む

私はこの手紙を讀むて泣くばかりであります。私は宗教家としての生命をくりかへし教へられてあります。私が心臓に鋭利なる刃をもつてさゝるゝ様であります。信徒の奉る佛物に細胞一個も血球一つも養育せられて、佛の前に信仰なさ肉と骨とにて恭敬し、金剛の信仰なくして信徒の前に德音を宣傳せば、宇宙間の極重の惡人であります。私は若し佛の慈光に接せざる以前なりしならば、嘲笑をもてよみ終りしかも計られず、二十五日認められたるは私には何んとも云へぬ感があります。母は常に私の基督教に關係したるを大に心配してありしが、この手紙にも基督教に云々又六人の兄弟御法をすゝめあいの詞は、私には母の心をいたむる眼にみる様であります。私は母に對しては唯感涙の外ありません。今年になりまして舍兄にむけて母は次の如くよこしました。

多忙なれば一寸申します。御本山が悪いの、僧侶がいけないと云はず、人の志が見て我が志が直せとか、伊勢和尚の如く一人よくなれば一家一村一國に及ばす道理にて、人の事云はずとも我が身に御慈悲をよろこばれよ。又祖父様や曾祖父様は、あれほどに迷惑(安心問題にて)せられても、人を恨みず仇をむけず御法は我はないとて遂に隣寺をまるくして行かれました。貢も耶蘇教に傾いたなど云はれては、和尚の孫にあの様なものがと云はれては氣の毒であります。

教界時事に兄がかきたるを見て注意せられたのであります。が、私には實に骨に切り入る様であります。私は佛陀の大威神力は私をして天地の間に肉美はしく血汚れなく眞摯なる希



望ある人生に生れしめたまひて、自己の心中の淺間敷事を蔽ひ包まむとしたる者を、赤裸体に人に懺悔するは、何むたる廣大なる佛の恵に浴するものでありませうか。

## 信仰の経過と人に

### 告ぐるの書

佐々木哲郎

寒氣もやう／＼に薄らぎゆきて、昨日今日は梅花咲き匂ふ暖かき時候となりました、姉君には、慈光のもとに、御靜安の御事と御喜び申し上げて居ります、偕出京以來は、絶えず、修養に關して、姉君の御話をも承はり、又私よりも申上げて益々深く信仰の妙趣を味ふを得る嬉しさに、かね／＼難有きこと、感謝いたして居ります。今日は又、例の御便りとして、自分の感じましたまゝを有体に、一通り御話申上げたいと思ひます、

繰返すやうでありますけれど、始めに自分は、人生の醉生夢死に不満足で、何とかして永遠絶對の靈境が望ましく、兎も角も自分で理想なるものを構へたまではよかつたものの、その中に、漸々と起つてくる矛盾衝突に遇ふて、いろ／＼と苦痛を感じ始め、終りに非常な煩悶に陥りまして、まるで暗黒な、曖昧な、無意義の生活を續けて居りましたが、甚だ不思議なる因縁に依つて、信仰の門にはいることが出来ましたこ

とは兼ねて御話申上げた通りであります。自分はこの瞬間に於て、全く佛智の不可思議なること、慈悲の廣大無邊なることを確信することが出来ました、何故とならば、私が過去の失策に對する恨みは、私の懷いて居る理想に非常な打撃を加へ、益々前途猛進の勇みと望みとを阻害しましたので、これは私の日夜に心を離れざる苦痛煩悶の種であつたのであります、當時私は、自分の所謂現在安住の主義の下に、色々と鎮靜を試みましたが、到底内心の満足を得ない、過去回想の苦痛は、いつも念頭を去ることはなくて、夜臥床に就いて、精神が落付か／＼つた時と、朝目醒めて、一日の生活を思ふ時とは、必らずその追回が始まるので、その苦痛は引いて、その日の望みを拒み、勇みの心を破つて、毎日のやうに不愉快な、幽僻な感想を續けたのであります、それ故、ましてや前途の理想に對する光明などは、日一日と薄らぎ去るので、自分の苦しさ心細さ、今から考へて見ても、實に情けないと思ふ程であります、然るに不思議なるかな、一度慈光に接してからには、從來の追回煩悶の情が、恰かも一刀兩斷せられたかの如くに、翌朝からは起つて來なかつたので、自分乍ら怪しいと思ふた程であります、過去の事實そのものが、思ひ浮ばないといふのでは決してありませんが、それに附隨して起るべき筈の苦痛の感想は消え去つたのであります、そこで今までの暗黒、煩悶、失望、苦痛の世界は一變して、光明、歡喜、希望、慰安の世界に轉回されたので、私の嬉しさ喜ばしさは胸に溢れて、れのづと浮き／＼するやうに、所謂雀躍歡喜の境遇に入れられましたので、これはその不可思議を信ず

る第一の原因となつたのであります。又平素自分から過去の記憶を抹殺しやうと努めて、益々忘却すること難く、思へば思ふにつれて、いよ／＼苦痛の度を高めた過去の経歴に、今思へば思ふほど、一々無限不可思議の意義を認めて、全く自己一身を救はんが爲め、日夜に心をくだかせ玉ふ如來大悲の一貫せる、方便引入の歴史なりしことを自覺して、益々深く感謝の念に満たされたのがその第二の原因であります。次にこれまでも自分が、自力的見解の下に、或は哲學的に、或は道義的に、解釋を試みて、一句もその眞意義を得ざるに苦しみましたかの歎異鈔を、翌朝佛間に於て拜誦いたしますに、奇なる哉、心絃共鳴、暗中一點の燈を得て、愈々自分の罪惡無力を感じると共に、益々大悲無窮の救済に感泣致しました事が、これその第三の原因とも申すべきものであります。その外種々雑多なる靈界の實感、頻々として胸に湧き、昨日と今日との自分を較べて見るのに、全くその天地を異にして居りますので、自分は何といふ理由なしに、たゞ偏に佛德の廣大、佛智の不可思議を確信すべく、餘儀なくせられたのであります。この内心に起れる一大革命は、何處の方面から考へて見ても、これが昨日までの自分の力によりてなされたとは如何してもおもへませぬ。

自分はこれまで確かに懺悔界の大魔王となつて居つたのであります、内に濁惡の心を藏して、外に賢善の相を現はして居つたのであります、一切人の眼を標準として、自分に中心を置かなかつたのであります、自分を虚偽の衣に包みて、外目に人格の高潔を飾つて居つたのであります、淺間しき下劣

の性根、自分乍ら愛想の盡さる程暗愚の者なれども、汚れの眼をもて、汚れの自分を見て居つた私は、到底自分の醜劣を自覺することが出来なかつたのであります。例へば明鏡に向つて始めてれのが面像の醜さを照檢し得たる如く、今大悲の光明に照されたる自分は、始めて虚偽の衣を脱して、如來の前に現はれましたので、此に全く自分は煩惱充實の素凡夫であることの自覺を、根底より與へられたのであります、自分は進退こゝに谷まつて、最早一步も動くことが出来なくなりましたので、大悲救済の本願、不可思議の妙力に、慕進直入して、絶對依憑の信仰にはいることが出来た次第であります。

何事もあげて御親に御任せ申したる自分には、最早少しの心配もありませぬ、頼め救はんと言ひ玉ひて、われらが罪惡、煩惱、苦痛、悲嘆、を引受け玉へる御親にませば、この位愉快な、嬉しいことはありませぬ、今まで重荷を擔へるに引更へて、身の軽きことかぎりなく、自分には云ふに云はれぬ歡びと、慰めとを與へられたのであります。

その後しばらくの間は、嬉しさ、喜ばしさのあまりに、心も心ならず、氣も氣ならず、何を見ても、何を聞いても、たゞ嬉しいばかりにて、自分は、現在の人世より未來永遠に涉りて、悉く光明の世界を認め、一時は娑婆こそ即ち淨土なれと、感じました次第であります。然れども大悲如來は、再び自覺の機會を自分に與へられて、淨土穢土に對する信念を明かにして下したのであります。自分は思ひますに、現世は即ち淨土なるべく、われら直ちに佛陀たるべくば、われらは現に、



玄妙無限の活作用なくてはならぬ筈であります。然るにわれら事實に於て、自己の力によつては、何事も爲し得ざるを知るのみならず、思ふことは思ふ通りに、爲しとぐることは出来ませぬ。祖師聖人仰せ玉は、慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり、しかれども、れもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし、また淨土の慈悲といふは、念佛して、いそぎ佛になりて、大慈大悲心をもて、れもふがごとく、衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかによし、不便とれもとても、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし、しかれば、念佛もうすのみず、すゑとほりたる大慈悲心にてさふらふべきと、云々、自分にこの仰せをかしこみて、疑雲を拂ふことが出来ました、正に宿業の繫縛たるべきこの世に於て、汚れの心に充てる自分は、全く何事をも爲し得る者でないとの自覺を興へられましたと共に、超世の悲願に乘托して、われらが赴くべき究竟の彼岸は、これ眞實の淨土たることを、信領させていたゞいたのであります。聖人又のたまはく、親鸞は、父母孝養のためとて、一遍にても念佛まうしたること、いまださふらはず、そのゆゑは、一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり、いづれもこの順次生に佛になりてたすけさふらふべきなり、わがちからにて、はげむ善にてもさふらはこそ、念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ、たゞ自力をすて、いそぎ淨土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなりと、云々。自

分はこれによつて、いよ／＼淨土に對する信仰の一刷新をうけたのであります。又その頃、一日、自分は友人と九段の遊就館に散歩しました、上野戦争の折に用ゐるとかいふ「欣求淨土、厭離穢土」を染めたる旗指物を見まして、彼等が赫々たる希望のもとに、如何に勇戦奮闘したりけん當年の意氣を忍び、非常な感想にうたれて歸りましたが、その夜、嘗て「求道」の巻首に掲げられたる、近角先生の、「父の示寂によりて與へられたる教訓」をよみまして、こゝに益々淨土現世の區別が、判然と自分の信界にはいつたのであります。尙又それに加へて、目下滿洲戦塵の間に居ります私の叔父が、既に御親の悲願に信賴して居ります事とて、嘗て私に「われらが永遠の住家こそかの安養の淨土なるぞ」といはれたる語が、今耳新しく胸に響き渡り、且つは、戦地より來る書信には、いつも救済の恩徳をたゞへ、往生の決定を喜んでまゐりますので、これは更に一層自分の確信を強むるのに、與つて力あつたことと思ふて居ります。

あゝ大願の廣海は、品位階級を擇び玉はず、一切の凡聖賢愚、やがては彌陀一佛を中心として、集合歸入すべき盛觀を感得して、自分の未來に對する希望は、いよ／＼光明の度を高めました次第であります。世の人々は日々老死の境に匠くを嘆くのに自分は何となく、歩一步と光明の土に近づくの思のみせられ、その餘影は、自分の日常の生活に反射し來りまして、非常の勇氣と、慰安とを覺ゆる次第であります、何故に自分に斯様な信仰が起つて來ましたかは、自分の理論智識の到底説明解釋を許しませぬので、自分乍ら一向に何故かどわかり

ませぬ。されば、たゞ自分の信界に現はれた實感であると、申上ぐるより外ありません、哲學科學の知識を以て、安心を得ることが出来なかつた自分、倫理道德の教ふる所を以て、満足し兼ねたる自分は、今明らかに、相對現象の世界を超絶し、因果流轉の法則を横斷せる、如來不可思議の妙力にあひ奉りて、歡喜慰安を興へられました廣大の恩徳を、日夜に感謝いたして居ります。たとひ諸門をぞりて、念佛は、かひなきひとのためなり、この宗あさしいやといふとも、われらがごとく、下根の凡夫、一文不通のもの、信ずれば、たすかるよし、うけたまはりて、信じさふらへば、さらに上根のひとのためにはいやくとも、われらがためには最上の法にてまします、たとひ自餘の教法はすぐれたりとも、みづからがためには、器量およばざればつとめがたし、われもひとと生死をはなれんことを諸佛の御本意にておはしませば、御さまたげあるべからず。嘗ては、合理的信仰ならではなぞと小ざかしく云ひました自分の、淺ましき今更にお耻かしく、たゞ／＼不可稱、不可説、不可思議なりと信じ奉るばかりであります。

たとひ自分は御親を忘るゝことがありまして、御親は決して自分を離れ玉はぬのであります、日夜暖かき慈愛のふところにいだかるゝ私は、心配もなく、恐怖もなく、安らかに人生を渡ることの出来る幸を興へられましたことを喜んで居ります、凡ての苦痛より救はれたる自分には、此の世の善惡をば、過去業因のまゝにさしませ、救済往生の一大事をば、如來の御計らひにまかせ奉るのみであります。例へば盲蛇に

も似たる煩惱の自分なれば、疑惑罪惡に迷ひ込むことが時々に起つてまゐります、しかし「思ふまい」「致すまい」と思へば思ふほど、益々闇より闇へと深入りする自分でありませぬ故に、今は自分にてどのやうに處置せんかとの考も起らず、たゞ佛名を念じて、その御計らひを仰ぐばかりであります。よしや自分は如何なる苦患逆境に陥ることがありまして、自分には、攝取不捨と誓ひ玉へる如來ましますれば、畢竟如來よきに計らはせ玉ふべしと信じて、自分はたゞ大命のまに／＼動くのみであります。

煩悶苦痛に陥つたときは、きつと自らの計らひを用ゐたときであることは、自分の信仰上の經驗であります故に、自分には、自力の念佛は大禁物であります。救済はいつも御親にありますから、自分で自分をどうしやうと考ふる必要は更にありますませぬ、しかし、御親はたゞ自分、自覺と、奮勵とを與へ玉ふのであります、或るときは、又随分人を惡しざまに思ひ、又腹の立つやうなこともあります。かく心猿意馬は、折々に狂ひ出すことはありまして、御親は直ちに自分を引き止め玉ふのであります、言ひ換ふれば、對手を考ふることをばやめて、自分を顧みるやうにしてくださるのであります、自分を顧みるときに、自分の過ちの多きこと、罪の深いことが、鮮やかに見えさつて、向ふを被れこれ考ふるどころでない、如何にも自分は悪いのである、間違つて居る、人の罵り毀りも尤もであるといふ自覺が、起つてまゐります。それと共に、自分の淺ましきに引換へ、益々大慈大願の程頼もしく感ぜられ、従つて自分の過ちを矯めやうといふ勇氣も起つて



くるのであります。一旦自分の無力無能を知らせられた以上には、自分でどうしやうといふ考を頭から持つて居ないことは、前に申上げた通りであります。思ふこと、考ふこと、爲すこと、行ふこと、何一つとしてまよひのきづなにあらざることをなす自分は、自分の力で改善力行することなどは迎も出来ませぬ、然るに昏昧の状態にある自分に、斯様な自覺が起つたとすれば、これは自分の力ではなくて、確かに如來によつて起されたる自覺であります。嘗ては、斯くせねばならぬ」といふ理想の標準に照して、力味心に勵んだことは、見事一々失敗に終はりましたが、それはその内容が、全く根底から違つて居たからだと思ひます。自覺が御親によりて起されたとすれば、その修養力行も自分の力ではない、全くは親の力である、御親の力であればこそ、ねのづと勇氣も百倍して、日々に自分の面目を新たにすることが出来るのであると信じて居ります。

人の罵り、人の辱めをうけることがあるとすれば、随分胸悪く感じて、一時は穩かならぬ思がせられます。しかし自分はずい様御親を念じて、無抵抗の態度に出づるときには、苦みもれのつと消え去るのであります。いつもの經驗に照して見ますればこれらのことは全く大悲策勵の御聲であつたと、あとから氣が付いて、一層感謝の念を深くする次第であります。何故に自分は、所謂順境の事柄をば、大悲の恩寵と感し、逆境の事柄をば、如來の策勵と感するやうになつたかと申せば、自分の過去の經歷を考へて見ますに、その事情、その境遇、悉く大悲の引入方便の一貫せることを認めて、何一つと

して救済の因縁を含まざるものなき、深遠の意義を信じますからであります。凡情の淺間しさには、そのとき左様に直覺することは出来ないで、後に氣の付く習ひなれば、いつもあとから懺悔することが多いのであります。然れども又一刻たりとも早く、この自覺を興へらるゝ幸も、偏に御親の大悲に依ること、感謝いたして居ります。

以上は、その後の信仰の經過とも云ふべきものを一通り一括して申上げたつもりであります、前後の秩序整はぬ罪は、何卒御許し下さりませ。

御地は猶餘寒厳しかること、御察申して居ります、御兩親様を初め皆々様、御身御大切に遊ばさるやう祈上げます。

餘は又追て申上げ度、終りに望みまして、姉君と共に、御和讃二首を拜讀して、此度はこれにて筆を擱くこと、いたします。

#### 彌陀觀音大勢至

大願のふねに乗してぞ

生死のうみにうかみつゝ

有情をよばふてのせたまふ』

彌陀大悲の誓願を

ふかく信せんひとはみな

ねてもさめてもへだてなく

南無阿彌陀佛をとなくべし』

村地姉君

## 靈 蹟

### 五臺山探勝記

菊池秀言

大谷派本山の清國上海に開教するや實に明治八年に在り是より先小栗栖香頂天資豪縱博學多材の資を以て夙に支那を觀風して布教の意見を抱抱し錫を北京に駐めて五臺山に上り又南方天臺天童等の諸山に游ひ歸朝の後赤誠を披瀝して當路に開陳し遂に此舉を決行するに至れり是を本朝宗教者の海外に於る傳道の矯矢なりとす予時に京都教師教校に在り明治九年九月<sup>時二</sup>清國出張の敎命を蒙り同學數名と共に上海本願寺別院に抵り主として土語を修む同年十月北京出張の撰に中り同月十日栗山覺、大山大鳳、以下五名、谷了然に隨て啓行す乃ち纜を申浦江に解き海路七日を経て直ちに天津に達す<sup>汽船の患生ずるに二日を要す</sup>陸路三日にして北京に進む谷了然は諸件を料理して上海に回り予輩は留りて語學を修め旁ら同行の學生に佛典並に史乘を授く蓋し清國の談話に官話と土語の區別あり官話は所謂上等語にして内地各省其風俗を異にし語音亦た多少の轉訛を免る能はざるも廣く全國の高貴品位ある者の間に行はるる通用語なり又土語は其省其府縣に依て口音を別にし都て一定せざるものなり予輩は此官話を學ぶ初めは城外菜市口

(文天祥の事なり)法源寺に寓す宋の謝枋得の召されて寓せし所に於て城外八大寺の一なり(寺の後に謝公祠あり)明治十二年歸朝す同十二年十一月再び渡航して北京に抵る二等軍醫生、望吉左久馬氏と同伴す此際より純然たる支那の僧服を着け諸般の用度金土人に同じし是れ一は布教の便法にして土人と交接し易く且は衆庶の嫌疑を避るに宜しければなり爾來儒官文學者の往來する者頗る多く且高貴の門に出入するとを得たり又英國人にして佛教を討る者あり屢來て會見を請ひ道を談するに至る抑清國の佛教は二大區劃となすへし一には舊來の佛教也二には喇嘛教也北京にては衣色を以て之を分て舊來の佛教を青衣派として喇嘛教を黃衣派とす舊來の佛教の中、敎家は極めて衰微し惟た南方天臺山の近傍に於て僅かに其餘喘を保つ者の如し又禪家は頗る全國に普及して十八省中何の地にもあらずるなし政府僧祿司を置之を管理す服制は普通青色を依用す<sup>晉朝の遺物</sup>但た官僧は木蘭色を穿つことを得喇嘛教に擇んて青衣派と稱する所以なり南方天臺山に住する僧徒中には稍や解行に篤き者ありと聞く北京に青衣派あり曰く臨濟、曰く曹洞、曰く天臺、曰く華嚴、曰く法相、曰く律、是也城内に八大寺あり城外に亦た八大寺あり而して所謂大叢林の和尚なる者、多くは官邊俗界に援縁趨走して福利を貪るの徒にして其他の僧侶に至ては知るべき耳、特り龍泉寺本然老和尚は齡耳順を過て比較的に學解と才識とを具備せり曩に小栗栖香頂此に就て京語を學び予輩復た時時之に參して三經音讀其他宗教の事情を聴くとを得たり凡そ僧侶の生活に係る狀態は寺有の租と賃房<sup>賃金</sup>と葬祭法會等の收入に依る古來虛禮



を貴ぶ國風として葬祭の布施極めて多く予が會て寓せし法源寺に於て李鴻藻時ニ協辦大學士の官たり母堂の葬儀には當日一千兩を布施に供し且棺柩を一百日間一房内に安して大臣毎日其邸を出て喪服の馬車に駕し衣帶及馬車の裝飾皆白布を用ふ房に進み靈に對して叩頭禮拜するを例とす此期間を過れば直ちに官を辭して原籍に回て三年の喪を行ふ此際亦た厚く房租の謝禮を修むと云故に上流又は豪家に縁故多き者は最も有難なりとす而して上流に對して道を説く者なきのみならず民間に於る布教傳道等は絶無にして葬祭讀經の外に能事なしと云も誣言には非るへし又民間の風俗は相率て現世の福利を求るに汲汲して朝夕金剛般若を念して祈禱を爲すもの多し

喇嘛教は西藏より起て蒙古滿洲に普及し清朝の西藏及蒙古懷柔の一策として之を崇奉するや極めて優渥なり故に西藏には法王を置いて政教を管理せしめ之を統監するに駐藏欽差大臣を以てし又蒙古の諸部落には活圖克圖、扎薩克等の大喇嘛を置いて之を管理し北京には雍和宮あり崇慈寺あり梅檀寺あり隆福寺あり護國寺あり黃寺黑寺等あり就中雍和宮は故との雍正帝の離宮を以て之に充る者にして結構雄壯金碧莊嚴に他寺に冠たり蒙古喇嘛常に住する者數千人其資糧は政府之を供給す内務府の所管なり予が北京に駐留せし時の管主を洞潤爾活圖克圖と云活圖克圖は再來人ト云が如し滿蒙清藏四國の語に通ず清帝の師とする所にして土人之を活佛と稱す宮中に朝して讀經するに方ては紅頂を戴き黃袍を穿き黃轎に駕し從者警衛す大官の參朝に異らす帝室の優遇は郡王の上班に列せしむる屢次之を訪問對話せしに同教同文にして且海外の人なるを以て毎に懇篤な

る待遇を受けたり五臺の行途に上るや特に丁寧なる執照照會を製して予に與へしを以て頗る便宜を得へたり歸朝に際しては我法主に贈るに西藏觀音像及名香數又予に贈るに自筆の書及數品を以てす

按するに喇嘛教喇嘛は無上の意也上士又は上人と云が如しに二派あり舊教を紅教派とし新教を黃教派とす舊教即ち紅教の開祖を巴特瑪薩木巴瓦と云中印度の人なり

河口縣海西藏旅行記に曰く西藏の北部に(アムド)と云ところあり其所の(ゲンカ)即ち葱嶺の間にある家に生れて佛教の腐敗を一洗す乃ち(デエ)(尊或は聖の義)と敬稱して(サエンカ)と云云

唐の肅宗の時に方て西藏主特蘇離德燦之を招請して傳教せしむ此人巧みに佛教の解釋を以て自己の創する肉欲主義に附會し肉食妻帶飲酒等は五濁世に於て成佛得脱の甚深微妙の方法なりとして之を勵行せり經文も猥褻にして殆んど讀む可らざるものなりと云五百年以前は極めて隆盛なり

佛祖通載に曰く如來滅度の後千餘年にして西蕃國(西藏なり)中に初て王あり曰クハ囉囉登登と曰ふ二十三代に王あり名て哈陀囉囉登登と曰ふ是時佛教始めて至る後第五代に王あり雙贊思甘普と曰ふ時に班彌陀を阿連陀と名く譯主の名を端美三波羅と曰ふ教法を翻譯し哈陀囉囉登登の精舎を修建し教法を傳流す

按するに哈陀囉囉登登は聖武記の吐蕃贊普にして唐太宗の女文成公主を娶り大に佛教を興せし人なり

後第五代に主あり名て哈囉囉囉登登と曰ふ是王王善海大師と蓮華生上師と迦摩羅什維班彌達成就人等と昆盧迦那羅法住及ひ康龍贊護の七人を召請して教法を翻譯す餘の班彌陀は諸の譯主と共に廣く教法を翻譯して三摩の禁誡興流して國に在り

是に由て之を觀れば西藏王吐蕃贊普なるもの唐太宗の女文成公主を娶て大に佛教を興し次に持蘇離德燦なるもの唐肅宗の女金城公主を娶て大に廟宇を興し巴特瑪に就て驅魔の秘咒を練習し諸の法要と及び七百二十佛の灌頂を受け又土伯特の天子子相承して其法を傳持す適々元の世祖忽必烈支那國を一統して帝位に登るの運に膺て援思八國師土波國より出たり天縱英明紅教十七代に當る薩思加哇國師ノ伯父也なる者に就て學ぶ秘密の伽陀一二千言眼を過れば輒ち誦を成す七歳にして法を演ふ辨博縱橫なり特に世祖の尊禮する所となる師二十二歳世祖登極す廼ち尊んで國師と爲し授るに玉印を以てし中原の法主に任して天下の教門を統しむ至元七年師三十一歳詔して大元の國字を製せしむ成るに及て朝省郡縣遵ひ用て一代の典章と爲す升せて帝師大寶法王と號し更に玉印を賜て諸國の釋教を統領せしむ至元十七年十二月二十二日師四十二歳にして示寂す帝震悼に勝へず大塔を京師に建て眞身の舍利を寶藏し輪奐金碧儼然と稱す英宗皇帝各路に詔して帝師殿を立て追諡して皇天之下、一人之上、開教宣文、輔治大聖、至德普覺、眞智祐國、如意大寶法王、西天佛子、大元帝師、班彌陀、援思巴、と云(班彌陀は五明に通曉する者の稱にて大善知識と曰んか如し)

凡そ支那國に於ける帝王の崇奉此の如く隆渥なるもの希なり喇嘛教の興る偶然にあらず師の弟子に諱じなる者あり聰慧博學屢は異蹟を現はす乃ち帝の尊信する所となり特に對召を蒙る其遷化に方て金剛上士の號を賜ふ是に於て喇嘛教益々熾んなり佛祖通載に據るに世祖佛教を篤信して大内裡に皆な眞言

河口縣海西藏旅行記に曰く西藏の北部に(アムド)と云ところあり其所の(ゲンカ)即ち葱嶺の間にある家に生れて佛教の腐敗を一洗す乃ち(デエ)(尊或は聖の義)と敬稱して(サエンカ)と云云

按するに元朝發思八國師は本朝眞宗開祖見眞大師と同時代にして見眞大師より少きこと六十六歳又宗喀巴の出生せる永樂十五年は本朝 稱光天皇應永二十四年にして眞宗中興蓮如上人三歳の時に當る東西萬里期せずして大法儀を出して斯民を救ふ古今一例なり



襲奉して惟た之を抽象的に解釋し男は方便女は智慧を表示す所謂方便と慈悲と一致して成佛すと云か如き説明法を用へたり其紅教に異る所を大別すれば一には衣帽の色異なり二には咒字咒語異り三には紅教は肉妻を許して其子に傳ふ黃教は妻帯を禁じて轉生に因て相承するの三異あり

原語に呼異<sup>ハブイ</sup>勒<sup>レ</sup>罕<sup>ハム</sup>爰<sup>エ</sup>に化身又は轉生と曰ふ此轉生の説は新教の一大特象にして最も他の注意を要する所なり按ずるに宗喀巴に二弟子あり一を達賴と曰ひ一を班禪と曰ふ相傳て達賴を觀音分體の光と爲し班禪を金剛の化身と爲し皆死して其遺を失はす自ら往生する所を知る其徒輒ち往て之を迎ひ立つ常に輪廻に在て本性不昧なりと云故に達賴班禪世を易て互に師と相爲る達賴派は布達拉に在り班禪派は札什倫布に在て傳燈繼承す達賴一世を敦根珠巴と曰ふ即ち贊布の裔にして世世蕃王たり位を捨て僧と爲る始て法王を以て藏王を兼ね是に於て宇内一種の佛法を開創す

河口靈海西藏旅行記(大旨を抄録す)に曰く轉生の説はソルカールの弟子にケングンブより起る遷化の時に何の處に生ると遺言せり後其處に生れた者ありて生れて覺くして自己の寺に歸りたひと云出た其寺は何處と問とダシルフンブア一寺なりと云た此言の一致せるより法王となられた五代目の法王をナガク、ラン、キヤム、ツォ、(言力海の意)と云(聖武記の羅卜藏札木蘇にして初て清朝に通ず)此人より法王政府の神下の法が確定せられたり其神に四あり一チーチュニニサムヤエ三ラーム四ガートン從來は宗教のみなりしに此王より政教一致となれり(凡三百年前なり)法王遷化して一年も經由せざる間に四箇の寺(神下)へ命を下し何處に轉生せしかを判斷せしむ各神下の自信する處を述るを以て多くは三人ほどの候補者を出す此候補者五歳位になると拉薩の政府に迎へ支那の欽差大臣と代理法王とが立合、又大臣高僧等立合をなす黄金の繩に子供の名を書いて入れ封をなして七日間祈禱をなし眞實の化身を得るやうにとて大祈禱を開き了て各

自立合にて封疆を檢し邊を開て欽差駐藏大臣が象牙の箸を持て眼を塞ぎながら聖中に入て一個を摘出す此に中るを法王とす(此撰に中るの家は王族として公爵を授けを以て隨分賄賂行ると云)而して此候補者に法王たるべき自信力を附して特別の教育をなす云云

法位累世其間奸徒を出して假位を弄するものあり徒らに尊大虚儀の末節に拘泥して眞成の佛理を修めす途に權勢爭奪の過むあたはざる金奔巴瓶の弊習をなして甚きは法王の毒殺を敢て行ふものあるに至る物久きを經て必らず腐敗す之か改新修補を適宜に施さるれば復た壞廢用ふ可らざるの不幸に陥ん慨すへき哉惟ふに清朝の政策たる康熙乾隆の明天子出て泰始皇以來恆に漢北の爲に侵略せらるゝを深患となせし蒙古西蕃の懷柔策に非常の軫念を勞し喇嘛教徒を優遇して犢犢の俗を變して淳朴の風を養ひ殘忍の性を化して溫厚の民と爲す而して活潑勇武の氣銷沈して翻て魯西亞をして侵略を慍恣ならしむ一張一弛は天理の免るあたはざるものと雖も愛親覺羅氏の爲に之を悲み併せて我佛日の爲に深く之を惜む

又北京に道教あり此教は元來老子道德經に淵源す儒教と共に支那固有に屬す後漢明帝の朝摩騰法蘭初て到りし時早く已に天下の名山多く道士の占る所と爲る由來佛教に抗拒して張弛あり夫の三武一宗の佛教の廢滅を謀りし厄難は皆な道士の煽動する所なり蓋し其教義たる孔子の現實主義の道德律に反對して虛無恬澹を以て自然の大道に導くを主要とす後佛教の旺盛を極るに至て其徒幽玄隱怪の説を設けて密かに佛教大乘の空理を自家の教義に牽強附會し又古來有名なる山林隱逸の君子或は名利に超脱せる英雄の事蹟を巧みに自己藥籠中に封

入して神仙を疊構して一種の宗教を形育し宋朝張真人に迫て之を大成して經卷服制皆な具り道士なるものは結髪方袍出家續經して葬祭には僧徒の後に隨ふ其教主は張真人の後裔にして孔子の子孫と同一累世公爵の恩榮を蒙り清帝即位の典禮を行ふに方て入朝祝賀するや金輻に駕す土人の諺に曰く天下金輻に駕する者三人曰く活佛曰く孔夫子の裔曰く張天師の裔此教には天仙、地仙、人仙、飛仙、水仙等の名目を立て坐禪導引等の方法を教て以て眞を修めしむ北京城外西北に白雲觀なる大廟あり元朝太極觀の遺墟にして宏大雄壯、道士住する者數百人建寅月十九日燕九節と稱して貴賤男女集賽するもの境内に墳墓す其人心に關する牢として未だ抜く可らず現今に於る支那人の大半は釋儒道の三教を以て一致なりとして自己の信仰を表白するに此三教を併稱して予は大教を信奉する者なりと言ふに至る

又北京に同回教を奉する一部類あり故と中央亞細亞人の歸化せしものなり其徒に限て禮拜寺を建て崇奉することを許す此種族蔓延して今に至て嚴肅なる自教國の成規を固守し他教の人と婚姻又は交際を爲さず曆象禮儀より茶菓浴場等の日常用具に至るまで皆な團結自辨す政府之を壓迫するときは命に抗して息まず現に新疆の亂の如きは暗に魯人の教唆に因ると雖も此種族間の結合力維持に關係するものありしと云

予の五臺山の游歴を企てしは此山は經説の所謂清凉山なるもの即ち文殊大士の聖境にして古來支那第一の靈場と稱す佛教初傳來の高僧も朝に請て此山に隱栖す其他獻身求道の士何れの國を問す何の宗派を擇はす崎嶇開闢千里を遠しとせずして

來詣せしもの頗る多し清朝乾隆帝の如き萬乘の身を以て尙此地に巡狩し又滿洲蒙古の王族或は上流輩にして毎年參詣するもの之を絶えず土人以爲く一ひ斯境を踐めは過去の積罪を一掃して心地清淨と爲り以て人天の導師たるに耐ふへしと故に

一は自己の信奉する宗教の時機に相應するを土人に曉知せしめん爲め一は將來布教の便宜を圖んが爲なり而して不敏短識且つ考證の書に乏く加之山上の僧徒多くは頑冥無學にして教義史蹟の沿革を詳悉せず殊に悲む予か資性癡鈍にして靈境の勝概を寫すの筆材を有せず數日の淹留見聞固より淺薄なり加るに言語晦澁を以てす以下記する所る當に九牛の一毛のみならず鹵薄亦た多からん偏へに後遊諸賢の是正を仰くと爾云明治十三年六月十九日早晨發程す僕北京の人胡兒なる者を携ふ馬車を雇て共に駕す凡そ清國內地旅行は布蓋(布圍)及び茶具等を相携へざるを得ず且旅店に泊して食事を辨するの法二途あり一切の食事を旅店に於て調理するものと又飯菜のみを給して其他は客自便宜に調理するものとなり予は後法を取て胡僕をして辨事せしむ彰儀門を出て時方に七點鐘なり盧溝橋を過く石橋あり河上に跨る長サ二百餘歩石欄に獅子を刻す金の明昌の初建る所る景曉月に可なり蘿溝曉月は京師八景の一に居る蕪詩を得たり

都門星夜出。疾驅馬車輪。野樹鴉噪白。茅店雞報晨。烟籠柳愈綠。蛙織麥加句。驚見蘆溝橋。猊蟠臥龍眠。鵬翼何地向。壯遊自此新。

水涵て流微なり八時に方て長新店に抵る三元號に就て午餐を喫す(北京の俗語云此地太平縣に屬す此を發して午後一時良鄉縣



の城外を過ぐ城壁高凡二丈、袤一里許、城南三里、樂毅の墓あり郊原渺渺一望千里旱麥水麥を植ふ藹光地に漾ふ行くこと凡そ十里驤風驟かに起て塵土天を蔽ふ驟雨大に注ぐ

北京附近には夏時細沙を飛すこと多し時に或は滿天空濛暗夜の如きあり忽ち塵

沙戸隙窓間に埋積す相傳て曰ふ蒙古大沙漠より飛散し來ると

途上兩傍皆な楊樹を植ふ綠霧密合點滴响を爲す一廟あり皇慧寺と曰ふ寶鎮店に抵り大元店に泊す袖間の時辰儀を檢すれば方に二時なり此日行くこと六十五里（清里の一里は凡そ我六丁餘に當る以下皆な清里を以て算す）此地人戸三百六十許、良郷縣に屬す

（以下副號）

## 嘆 咏

## 喜

荒 川

合掌してぞみ佛を  
ふしてをろかみ奉り  
眼開きてはろくに  
眺むれば目に入り來る  
山も草木も悉く  
夏のあしたの草に置く  
露の如くに新たなり

## 友に

甲 之

み佛ををろかみまつりみ佛をたふふることば我は  
知らざる  
み佛ををかみまつれば來し方も行末さへもわすれ  
てたぬし  
み佛をともしよるこふ友あれば命すぐとも我はな  
げかし  
罪深く生れて來しをみ佛にあひまつれるはありが  
たきかな  
み佛を思ひまつれば我れか身は露霜の日に消ぬる  
か如し  
み佛を思へりしかばみ佛は遂にわか身をすくひた  
まへり  
蜘蛛の糸を風吹きたわむはかなけき世にはあれど  
も佛守らす  
み佛の大きなさはしみくに凝りて集りわかう  
へにあり  
み佛を思ひまつれば我はまた何をなけかなけか  
ふべしや  
み佛をわれはよろこぶ君もまたよろこび給へわが  
よろこびを  
み佛はたふときなさけかたぶけて我いつくしむ我

我ふみて立つ荒金の  
土はゆらねどわが心  
空行く雲の風のまゝ  
定めなき世にありつゝも  
常に歡び胸に滿ち  
雲井はるけく眺むれば  
光たゞさす佛の國

磯打つ波のかるかやの  
束の間もなきごとく  
和まぬ心わづらひの  
海に沈めどさりなから  
たふとき佛のみゆかりは  
言も絶えぬるみなさけに  
我を導き給ふなり

たま／＼心しづまりて  
佛のみ名を念ずれば  
心樂しむみ佛の  
み名を念してわが友に  
向へば友もよろこべり  
いづくに行かんみ佛の  
み國に行かすいづくにか

\* \* \* \* \*

泣かんとす

目をあげて見れば物皆み佛のなさけこもりて我を  
なぐさむ

わが思むら雲起る時にして佛思へはぬぐふがごと  
し

わが思われはからずにみ佛のまに／＼行かむやす  
けからんに

み佛のかなしき願いまわれはしたしく身にぞをろ  
かみまつる

み佛を思ひまつればかけろいのはかなき世をも嘆  
くとはせじ

み佛のなさけのまゝに安らかに此世行かんは樂し  
からずや

み佛の大きなさけにむくいんと思ひいたれば涙ぐ  
ましむ

大きな光仰さしとさにつくりたる歌をし見ては我は  
なぐさむ





# 紹介

## ◎武家時 女學叢書

梅澤和軒校

梅澤兄に送りし書翰をかゝけて評語に代ふ。「小生も自ら親鸞聖人の遺著編集中に候が、異本の多き爲め掛合の煩はしきには、ほと／＼もてあまし候。兄の如きは殊に註釋まで加へられ候事として一段の御骨折と御察し申上候。世の人は獨善の事と申せば、獨りてもなきやうに思はれ候が、乍去殆ど人の知れざる處に苦心の在るものに候。たとへば一字不明の所ありても一々詮索して字確をたゞすが如き、それは／＼心配のものに候。大兄も定めし小生と御同感の事と存候。扱兄が武家時代の女學叢書と題せられしはまことに小生の意を得たるものに候。小生はあり跡に申せば徒に形式に流れて品もなく香もなく、實もなき文明の花を作らむと勉むるは現代の女子教育にはあまり感服不仕候。かゝる形式的教育の下に養はるゝ所謂女學生なるものは、輕燥で不實で、生意氣で、華奢であることは論ずるまでもなく、現今の女學生氣質なるものを證明してありある事と存候。

先づ巻頭第一に收めたる阿彌陀公の「庭訓」を讀み候。筆づきの尋常ならざる、まごころの溢れたる、吾ながら身に泌みてうれしかりき。なかに「人は心にて候ふなり」の一句何たる天來の警語に候や。如何に才能あればとて、如何に富有なればとて、如何に美しくして、心に直からざれば、朽ちたる大木の如く所詮何の益にも立ち不申候。心は凡ての人の生命に候。別して婦人に取れば、かけがひのなき寶に候。今の婦人方にせめては此の一句を心に讀みて度候。又「乳母の草紙」の冒頭に「容姿より心な勝れるを本とすべし」とある。又は神佛を信じ思召るものにて候。など、如何にも適切に候。兎もすれば宗教を無視する現時の潮流には頗る好薬と存候。次いで松蔭先生の「獄中より妹に與ふる書」は最も興味深く讀まれ候。流石は一世の偉人に候。四面暗黒を以て包まれつゝある獄窓に呻吟しながら從容として詢々教えて倦まざる所、誠に驚嘆に不堪次第に候。殊に觀音經を引き來りて其妙力を説きて、迷信に陥らざることをすゝめたるは、小生は心中大なる満足を得候。女流の信仰は或程度を過ぎると、全然信仰の中毒に

あたりて所謂迷信病に陥るとは往々見る所に候。返す／＼戒むべき事に候。松蔭先生のこの一文は、宗教的家庭的規範として熟讀すべきものに候。藤樹先生の『無草』は一句一語悉く教訓的ならざるなく、文章も平易に候。多くの例を擧げて説かれたるは、いと興深く感ぜられ候。一世の老儒たる面目は婉約の間にあらはれてうれしき候。この一篇の如き女學校の修身教科書として用ゐて、甚だ有益かと信ず申候。其他『老が心』『妻に與ふる書』『與新婦』『女訓』等の各篇は只一瞥したるまでに候。要するに、現代の女子教育に嫌焉たらざる小生に取りては、全篇何れも／＼活躍的(?)精神を以て讀過致候。心氣爽快として夏日を噛むの思有之候。不取敢こゝに一言を載して深く大兄の勞を謝する次第に候。早々(劍虹)

## ◎佛 陀 論 文學博士 村上專精著

本書は佛教統一論第三編として公にせられたるもの、彪然たる大冊子なり。吾人は先づ本書に接して博士の精緻なる頭腦と明快なる論斷に深く敬意を拂はざるを得ず。三千年の古へに溯りて深遠なる教理を導いて、埋没せる眞理を發揮しこゝに論究の端を開きたるは、吾人之を博士の功に歸せざるべからず。

今本書の内容を窺ふに初め序論に於て佛陀論發展に就て詳論し、本論に入りて歴史上の佛陀として固より之なるべからず。次に歴史以上の佛陀論として、上坐、大乘二派の佛身觀より説き起して、毗曇宗、三論宗、法相宗、成實宗、天臺宗、華嚴宗、密教、淨土、日蓮、禪家の佛身觀に亘りて廣く之を論究し、詳に經を引いて證とし、以て釋迦一佛論の鐵案を下せり。論議縱橫、筆風鋭を挾むの概あると共に、導引自在にして堅城を築くの趣ありといふも、決して過言にあらざる也。若し吾人をしして忌憚なく云はしめば、博士のこの鐵案には紛なからざる疑問を有するものなり。即ち釋迦中心の一佛論には容易に首肯し能はざるなり。博士をして云はしめば、例の宗派心に驅られたる不公平より起りたる議論なりとて一笑に付し去られんも知るべからずと雖。吾人は決して博士のこの議論には服すること能はざる也。こゝに其異論を列舉せざるも、吾等と教理を同じし信仰を同くする博士は、業既に明察し居るならむと信ずるものなり。吾人の意固より其議論を上下するにあらざるを以て、只吾人の立ち場を明にせば足れりとす。博士曰く余博士(即ち)窮る無宗無派の地位に坐して、之を講究せんとするにあれば、寧ろ根

## ◎起信哲學

文學士 蜷川龍夫著

本書は佛教全書第一編として刊行せられたり。著者はさきに孔夫子傳を著して、好評を得たる人、今又本書を出版せられたるを見て吾人は深く其精力主義の人たるに敬服するものなり。題して起信哲學としたるは、大乘佛教中有名なる起信論を哲學的に解釋せられたるに基くものなり。第一編に於ては印度思想を論じ、第二編起信論と哲學の關係を詳にし、第三編起信論の内容を明にし、第四編附録として起信論の翻譯、註釋書類をかゝけて研究の資糧に供せり。最後に起信論の譯義を載せられたるは、讀者に取りて最も便益多き事と信ず。理論の深遠なる起信論を取りて、著者の蘊蓄せる學理を發揮し、平易通俗何人も一讀了解し易からしめたるは、吾人著者の勞を多とせざるべからず。聞く、著者今筆を劍に代へて軍營中にありといふ。希くは自重せられむことを。(定價貳圓、金港堂)

## ◎日の雷の恩(蜷川龍夫著)

例の小波氏世界お伽噺の第六十六編なり。本編は上下の二篇に別かれ、「日の雷」は即ち其上にして「雷の恩」は其下なり。共にカル、クノルツ氏の『北米口碑集』より取れりといふ。「日の雷」は一匹老初古鬼、或る朝過睡中日光に背を焦かれたるを怨み、この遺趣を暗さむとて種々苦心計畫の後、終に世界の東端に到り旭日に向つて弓を射し、矢は誤またず中央に當りて日の玉は微塵に墜かれて地下に雨下し、却て兎は焼殺せらるゝといふ筋、亦「雷の恩」といふは一人の若物旅に病みて友に見捨てられ、幸ひ猪の翁に救はれて命を完ふし後更に雷の指導に従ひて猪の難を免れ、羽が生えて宙を飛び歸りて母と相會ふ而して前の友は雷に撃たれて死し若物は驢を討つといふ筋書きなり。筆の輕快は今更謂はず富饒なる趣味の裡陰に多大の教育を含む。眞に少年の良友と稱すべし。(一冊八錢東京博文館)

## ◎うかれ笛(蜷川龍夫著)

同上世界お伽噺の第六十七編なり。これは同くカル、クノルツ氏の『愛蘭土お伽噺』中より撰びたりといふ。例によりて筋の概要を記せば、怪力の好少年あり、母の命に従ひ山に入り薪を切る、森の魔物に會し之を取りひしごとく三度、救命の報酬として、誰にも負けぬといふ棒吹けば誰でも躍り出すといふ浮かれ笛、刃物にも斬られず火にもやけぬといふ笛を得たり。少年の怪力共に傳はるゝ偶々玉の姫愛戀症を病む王少年を召して仕合を爲さしめ姫の心を解かんと計る。少年即ち先づ王の武臣を倒し皆之を破る。意地悪き赤面大臣あり毒龍を退治せよと命ず、少年即ち龍を生擒し來り、而して浮かれ笛を吹く、龍をばどめとし室中皆躍り出す、亦地獄に行きて火の車を取り來る。赤面大臣之に觸れて焦死し王の姫始めて笑ふといふにあり。之を讀む少年心を樂しましむる事蓋し甚大ならむ。編者の勞多と稱すべき也(一冊八錢博文館)



## 時 報

## 軍艦日進戦死者追悼會

日露交戦來非常の偉勳を奏しつゝある軍艦日進戦死者の追悼會を竹内艦長已下艦員自身の經營によりて一月三十日横須賀下士集會所に於て執行せられたり、同軍艦主計長窪田重一中監は近角常觀と獨逸に於て相交はりしが特に交戦已來「信仰問題」を愛讀せられつゝある由巖谷連山人より聞きしかば、早速「信仰の余瀝」五十部を郵送して海軍各艦に分配を依頼せしかば、窪田氏は喜ひて此等の勞を執り玉ひ意外にも海軍軍艦内部にて信仰に心掛くる人を生ずるに至れり、此に於てや日進軍艦内にては早くも戦死者の英靈を慰むるために追悼會を執行せむとの議一決し、且つ艦中一同の望により近角常觀を召聘せらるることとなり窪田氏は其主任に充たられたり、故に氏より其意を通せられしかば、近角は直に之を快諾し、百目木と共に之に趣く、百目木前日より趣き、同地の大塚襄氏と相談して準備し、又軍艦に於ては左記の人々左の覺書の如く着々實行せられたり

○一月卅日午後一時八月十日海戦戦死者並ニ

第三回閉塞隊員(本艦撰出者)追吊會ヲ當下

士卒集會所ニ於テ施行覺書

一、追吊ハ近角常觀師ヲ招聘シ追吊ノ體裁ヲ終リ法話ヲ聽ク  
一、遺族ニ招待狀ヲ發スルコト

森下一等兵曹

永井二等兵曹

島三等機關兵曹

裝飾 掛

篠崎一等兵曹

宮内一等兵曹

池水一等機關兵曹

小野一等船匠手

古川二等兵曹

橋原二等信號兵曹

三十日午前近角横須賀に着し、窪田主計中監の迎を受け、直ちに下士卒集會所に赴きて祭壇を拜せしが、艦員の奔走して熱心に準備せらるゝ様子如何にも同心一體にしてかひなく思はれたり、窪田氏宅に一憩して、正午に至りて豫定の如く艦長已下及遺族一同と共に午餐の饗應を受く、艦長武内平太郎氏は近角滯歐の際佛國公使館武官たり、當時獨逸公使館附武官津田大佐突然胃壞瘍なる急病にかゝりて病死せられし時、武内氏は佛國より來りて葬儀主任として窪田中監と共に盡力せられしが、其時恰も近角は蘭田藤井兩師と共に津田氏の葬儀を執行したり、今や再び此處に相會するに至るは寧ろ意外なる奇縁と謂つべきか、午後一時近角は百目木及横須賀寺院僧侶法師五名と共に式場に出つ、式場は下士卒集會場の廣庭にして相模場は海軍旗を以て裝飾せられ、嚴かに位牌を安置せられ、且つ忠勇戦死者諸氏の靈儀は恭しく祭られたり曰

## 軍艦日進戦死者人名

第三回旅順閉塞の際、戦死者(四月三十日本艦發朝顏丸乗込明給二十七年五月三日の曉暴風怒濤の爲收容し能はす)

海軍上等機關兵曹勳七等功七級 田中清之助  
海軍一等兵曹勳七等功七級 伊藤周助

一、海兵團、砲隊、水雷團、其他當務部ノ者ニシテ其當時日進乗組兵員ヲ參拜セシメテ度照會スルコト  
一、遺族ハ新橋午前八時三十分發車ニテ來ル機案内シ參拜有無ノ返事ヲ要スルコト

一、遺族及僧侶ハ水交社ニ於テ靈饗スルコト艦長、軍醫長、窪田主計中監ハ之ニ接待會食ノコト

一、追吊ハ午後一時ヨリ開始シ三時ヲ以テ終結シ遺族ハ午後四時十五分發ノ汽車ニテ歸ヘル、コト

一、遺族ニハ適宜供物ヲ贈ルコト

一、當日下士卒ハ十一時ニ會食ヲナサシメ終ツテ中庭上陸ヲ許シ式場ニ赴カシム

一、當日在艦員中各分隊ヨリ凡ソ十名以内參拜ヲ許ス

一、當日下士卒ニハ式終テ便宜下士卒集會所ニ於テ供物菓子ヲ分配ス

一、遺族ハ停車場ヨリ人力車ニテ水交社ニ案内スルコト國枝中尉森下兵曹出迎フコト

一、横須賀鎮守府司令官井本艦司令官ニ屆ケルコト

一、町役場並ニ警察署ニ追吊會ヲ施行スルコト有志者ハ便宜參拜差支ナキ旨通知スルコト

一、案内狀ヲ出ス向キ左ノ如シ  
下士卒集會所長、參謀長、參謀副官、兵事官、警察署長、獎兵會會長、橫須賀町長、豊島村長、

一、松村少佐、藤江大機關士、延家大軍醫ニ通知スルコト  
窪田主計中監 井手大尉 立野大尉  
朝比奈 大主計 田中中機關士 秋土中尉  
國枝中尉 酒井上等兵曹 平山上等兵曹

庶務 掛 松井二等筆記  
秋山一等兵曹 生和一等兵曹 風間一等機關兵曹  
接 待 掛 堀内一等兵曹

海軍二等機關兵曹勳八等功七級 平賀長藏  
海軍三等機關兵曹勳八等功七級 阿部源吉  
海軍三等機關兵曹勳八等功七級 三野品藏  
海軍三等機關兵曹勳八等功七級 近藤東一郎  
海軍一等水兵勳八等功七級 龜谷善九郎  
海軍一等機關兵曹勳八等功七級 龜山彌吉  
黃海々戰の際戦死者(明治三十七年八月十日)

海軍機關大監從五位勳三等功四級 齋藤利昌

海軍少佐從六位勳四等功四級 高橋雄一

海軍少佐從六位勳四等功四級 松本直吉

海軍少佐從六位勳四等功四級 横山傳

海軍大主計正七位勳五等功五級 倉田順

海軍少尉勳六等功五級 川本幸雄

海軍筆記長從七位勳六等功六級 桑原恆之介

海軍上等信號兵曹勳六等功七級 原重行

海軍一等信號兵曹勳七等功七級 内田政助

海軍一等信號兵曹勳七等功七級 松崎清八郎

海軍一等軍樂手勳七等功七級 伊藤蕃

海軍三等兵曹勳八等功七級 木村寅吉

海軍三等信號兵曹勳八等功七級 野中久三

海軍三等信號兵曹勳八等功七級 加納瞭五郎

海軍三等信號兵曹勳八等功七級 影山彌吉

海軍三等信號兵曹勳八等功七級 尾高豐次郎

片岡第三艦隊長已下丁重なる供物は捧げられたり、先づ導師焼香し、僧侶一同阿彌陀經を讀誦し、後導師恭しく告白文を



拜誦せり曰く

明治三十八年一月三十日軍艦日進忠勇戦死諸士の精霊に告白し奉る、諸士は振古未曾有の國難に當り奮然身を挺て、義勇公に奉じ、遂に生を激浪の中に葬り、命を砲彈の間に捐て玉へり、嗚呼惟れ、一に諸士が上、天皇陛下に對し奉るの精忠雪の如く下國民に對し玉へる熱情火の如くなるによらずんばあらず、今や國威隆々として八紘に輝き、人道の大義煥として世界に明らかならむとす、是偏へに諸士が肉碎血漉の賜たらざるはなし、今や諸士が母として眠り玉ひし軍艦日進は、砲彈雨注の間を過ぎて横須賀軍港に凱旋し、諸士が父として事へ玉ひ、兄として親しみ玉ひ、弟として愛し玉ひし艦長已下將校下士卒諸士は初めて本國の土を踏み玉ひしの時、朝夕食卓を共にし、日夜床を並べ室を同じくして艱難を共にせし諸士は杳として其れ見るべからず、實に是れ終生の恨事にあらずや、生存諸士の慟哭止む能はざる固に其所なり、茲に本月本日孝明天皇祭の聖日を卜し諸士が生前最も親しかりし、横須賀軍港下士卒集會所に祭壇を設け、遙か諸士の精霊を慰め奉る、幸に予何等の宿縁ありてか此神聖なる席に臨みて聖經を讀誦して佛陀無限の慈悲海を讃嘆し奉るの榮を得たり、冀くば精霊勇猛として共に光明海の中に遊び玉へ、

和讃に曰く、大願海の中には、智愚の波こそなかりけれ、弘誓の船に乗りぬれば、大悲の風に任せたり、嗚呼佛陀無限の慈悲は海の如く深く、如來絶對の智慧は海の如く涯なし、而して此間佛陀救済の願力は大船の激浪の爲に動かさ

れざるが如し、たとひ人生の波濤荒れて腥風血雨の戦場を演じ出すと雖、結局佛陀無限の慈悲に照されて、盡十方無碍の光明の一大平和海を來たさるはなし、一たび此慈悲に遇はむか、一切の長は是我兄、一切の功は是我弟、十方衆生同一鹹味たらざるはなし、是實に永久の常樂、涅槃の靈界たらずむばあらず、今や諸士が父母は集り玉へり、親愛なる妻子は待座し玉へり、諸士は今や如來淨華の聖衆として遙かに吾人の上に影向し玉ふべし、聖人讃じて曰く大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜かに衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速かに無量光明土に到り、大涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也と、是實に諸士の味ひ玉ふ妙境ならむか、追慕鑽仰に堪へざる也、茲に度みて佛陀の大寶海を讃嘆し奉る、南無盡十方無碍光如來哀愍救護し玉へ、

### 第三求道會の實況

去月廿八日日本橋俱樂部に於て開會せし第三求道會は、健

實なる實業家の子弟及徒弟等四十人集會して最も眞面目なる會合は催されたり、西澤善七氏は此會を開くに至りし所以を述べ實業家が今後宗教の信仰を地盤として進むべきことを、近角は第一席に於て泰西の青年會の事業を詳説し、特に其起源を叙して、此の如き大事業も一商會の店員ジョージ、ウヰルヤムによりて作られたるものなるを説き、日本實業家の今後大に眞面目なるべきを勧め次に最も平易に且つ實驗的に佛陀の慈悲を説きて、信念を呼び起したり、二月は二十五日に第二回を開く

### 第一高等學校德風會夜會

德風會は青年學生の佛教の會としては最も古きもの、一なる可し、一昨年より特に信仰の氣運旺盛に赴き、其態度の眞面目なること其比を見ず、過去二年間、通常例會の外に求道學舍に於て月に二回夜會を開き、昨年來嘆異鈔を講本として近角之を講じ信仰談話をなしつつあるが、來會者三十人前後にして燈下團樂して爐を圍みて信仰を語る、實に清らかにして暖かなる會合なり、

### 信仰緣熟の氣運

東京に於て近時信仰問題の機縁熟し來りたること著しき事實なり、前回の日曜講話、多きは百人已上に達し、少くとも六七千人、殊に信仰談話會の如き其切實なる懺悔告白、見聞するもの非常の感動を起さるはなし、女子信仰談話會の如きも人數も増加し、又態に頗る眞摯にして、飽まで道を求め、光

を見ずむば止まざるの勢あり、其他個人として道を求むる人各種の社會より來たる、學生、軍人、女子、尼僧、看護婦、老人、僧侶等あり、又書を以て求むる人頗る多し、回答漸次遅るゝことあり諒察を請ふ所也、

#### ▲求道學舍日曜講話

○二月二十九日

佛陀無限の大慈悲

信仰談話會(講話後)

○二月五日

久遠の哀愍

○二月十二日

無我の實現

○二月十九日

内愚外賢

○二月二十八日

無根の信

▲第二求道會講話

○二月四日

佛陀の理想

○二月十一日

轉惡成善

○二月十八日

徹鑒の力

○二月二十五日

金剛の信

▲第三求道會講話

○二月二十五日

實業と宗教

吾が信仰的理想郷

近角 常 觀

近角 常 觀

佐々木月樵

近角 常 觀

近角 常 觀

近角 常 觀

近角 常 觀

近角 常 觀

近角 常 觀



領報告  
(第七回)

羽村求道會殿

埼玉 石丸 しげ殿

秋田 長井 法深殿

三才圖會

加賀 氏名 氏没

監日進乘込員一司殿

東京 小原 一 隴 殿

小計十九圓二十錢

通計金千百二十五圓八錢也

右御寄附と辱うし難有奉存候  
玆に謹んで感謝し奉り候也

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、益々信仰の必要を感じ。一般に道義の制裁弛み去りて、皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を饜まじとして胸中幾多の苦悶を抱き。社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來。聊か此の時運の必要に應せむとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け。此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潜めて信仰の問題を講し、互に心靈の修養に従ひしが、幸に佛陀冥祐と、師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員に求道の人々を容るゝ、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて幾多の人々を容るゝ、餘地なし、此に於てや止むなく、懇切なる道友の勧告に従ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。幸に篤實なる先輩の指導に従ひ忠實なる親友の贊助を仰き、着實なる實行によりて漸次其結果を挙げむことは實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ず事一日の事にあらざる。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり、故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むとを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細に調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを謹て白す。

明治三十六年十月

發起者 近 角 常 觀

明治三十六年十月

發起者 近角常觀

親見  
繙寫  
聖人  
全集

文  
學  
博  
士

南條文雄先生  
前田慧雲先生  
村上專精先生

監修 文明堂編輯局編纂

正價貳圓五拾錢  
四六形一千頁  
金文字入三方金  
郵送料拾六錢  
紙質印刷特撰  
四月三十日完成

●發刊の趣旨

宗教の本領は信仰にあり信仰は宗教の眞髓にして又永久の生命也。而して如何にして此眞髓に達し、永久の生命を得らるべきかこれ求道者が内心に懊惱する叫聲にあらずや。吾人は教祖の人格に觸るゝを以て最要適切の方法なりと信す。苟も人格に觸れむとせば其遺著を拜誦するの外なし。これ本堂が先づ親鸞聖人全集の發刊を企つる所以也。

蓋し日本佛教の精華は鐘りて鎌倉時代にあり。而して親鸞聖人此時に出て玉ひて、宗教の眞髓たる純他力の法幢を聳へし、直截簡明なる信仰を宣布し玉ふ。爾來幾百千萬の生靈をして、慰安の道に住せしめ、渴仰の首を低れしむる所以のもの、其人格の崇高にして遺徳の廣大なるに依らずんばあらず。今や年所悠々として遠く七百年を隔つと雖も、其崇高なる人格に接せむと欲せば、先づ遺著

◎ 辭山御書等	◎ 口傳鈔	◎ 御消息集	◎ 唯信鈔文意	◎ 正像末和讚	◎ 入出二門偈	◎ 教行信證
六卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	六卷
◎ 改邪鈔	◎ 往還廻回文類	◎ 末燈鈔	◎ 三經往生文類	◎ 淨土和讚	◎ 淨土文類聚鈔	◎ 淨土文類聚鈔
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷
◎ 執持鈔	◎ 歎異鈔	◎ 一念多念證文	◎ 尊號眞像銘文	◎ 高僧和讚	◎ 愚禿鈔	◎ 愚禿鈔
一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	一卷	二卷

を拜誦せざるべからず。本集は此等の遺文を集輯大成し、南條博士。村上博士。前田博士等の監修の下に、嚴正なる校訂を加へ、其漢文を以て記述せる分は、大抵和譯を用ゐて日夕拜誦の便を圖れり。其紙質印刷は特に精選し、製本は壯麗美麗にして且つ堅牢無比攜帶に便利にして決して眞宗聖典の名に背かざらむことを誓ふ。苟も眞宗の流を汲み、聖人の人格に接せむとするものは、是非とも座右に備へられむことを望む。

（用入録目書圖）堂明文區鄉本省市京東元兌發  
（す呈進は方の）地番五目丁四



# 無盡燈

二月一日發行  
代價一部拾錢

研究

シヨルペンハウエルの倫理觀(上)  
宗教的經驗の種々  
支那天台の性惡論(二)

修養

人生に對する余か感想の變化  
使徒保羅に就て

雜纂

肉食妻帶の宗風に就て  
西藏文大經嘆佛偈譯  
新春詩稿

時論

學生の氣風問題と國民の道德問題  
現世的宗教家と科學の勢潮  
窟內笑言

根本的宗教事業

忘却せられたる二大宗教事業  
一月の誌壇  
新刊紹介

報導

梵文妙法蓮華經和譯

東京府北豐島郡巢鴨村大字巢鴨

南條文雄

吉田致 福友成 稻葉圓 伊藤信 諸藤人 土井幸 張崎果 碩嶺徹 稚川樵 枯泉え 鳳仙窟 銚士

發行所 無盡燈社

## 文學士近角常觀著

### 信仰問題

三版 出來

人、苦悶を経て、初めて人生の眞跡を悟り世界を驚かす舞臺を過ぎて、終に靈の光明を鐘聲は已に曉天に響き、國民發揮す、今や、信仰問題の鐘聲は絶大の自覺を生じて火血の間に一大修養の震雷劇雨を夕陽西山の功を積みむとす。

本書挿入 眞寫葉九

▲帝國シカゴ青年會館  
▲英國議院及ウエストミンスター卿監  
▲アルトブルヒ城中央ルーテル聖書講義室  
▲巴里に於ける萬國宗教大會  
▲獨逸宗教改革の遺跡の圖五個

## 清淨界を現出せむ、國民信仰の地盤に立

鍛鍊陶冶二十世紀の最大理想を現實するの  
世界に於て必要に應ず、實に本書ならむ

▲菊版二百六十頁 製本高尚

▲上製價六十五錢(郵 拾錢)並製價五十錢(郵税八錢)

發兌元 東京本郷四丁目 電話下谷(二〇二九) 文明堂  
賣捌所 東京本郷森 求道發行所

發行所 東京神田區美土代町 三光堂

新詩集

## 靈華集

曉岩仁 鳥田科 敏一郎 先幽 生溪 序畫 文稿著 文稿著 錢四稅郵 錢卅價定 (刊近)

目要

◎靈美の華を歌へ  
る◎清光の調◎死  
しての後◎花雲◎  
金色佛◎靈馬星光  
に酔ふ◎雲舞ひ水  
曜る◎劍光慘絶◎  
大靈の光◎歡喜の  
ほのめき◎壁觀聖  
者を歌ふ◎愛妹の  
靈に手向くる詩◎  
辨慶鐘◎世界の泉  
◎神秘◎慈悲の海

發賣元 東京文明堂 京都法藏館

規定

- 一、本誌は毎月一回(二日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢
			に中五厘

●廣告料五號活字一行(二十七語)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年二月廿八日印刷  
明治三十八年三月一日發行

發行所 東京市本郷區森川町一番地  
印刷人 百目木智 幸力  
求道發行所 (電話下谷二四三二)

大賣捌所 東京市神田區神保町 文明堂  
同 本郷四丁目 文明堂



前號目次

求道

◎親鸞聖人の人格

◎信仰秘鍵

信仰は内心の革命也

信仰は人をして羈絆を脱せしむ

信心開發

歡喜愛樂

◎トルストイの非戰爭論と旅順の

陷落

講話

◎信仰圓熟の時機

近角 常觀

◎信仰の門戸は唯一のみ

近角 常觀

實驗

◎親友藤村操君の死より闇に陷り

終に光に遇ふ

藤原正

◎始めて光明を認めたる時人に

興ふるの書

藤井竟

◎最も要領を得たる信仰

塚本大患

嘆咏

◎我母に

八風

◎みすがた

白佛

◎心のまゝを

甲之

◎佛陀之聖訓

時報

哲學辭典

◎昨年の求道學會日曜講話及談話會出席人名

◎昨年の女子信仰談話會及出席人名

◎昨年の第二求道會講話演題

◎第三求道會開設

◎日曜講話演題

◎第二求道會講話概要

◎表紙畫